小さな世界の復讐者

ホープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小さな世界の復讐者

【Ｎコード】
Ｎ０９４８Ｖ

【作者名】
ホープ

【あらすじ】
とある街に住むポケモン、リク。彼の住む街は一夜を境に地図上から消滅する。運良く逃げ出すことのできたリクは、自分の街を消した奴に復讐を強く誓うのであった。が、奴らに関わるごとにこの世界の向こう側が見えてくる。それを知った彼は、何を思うのだろうか？
ここに記す物語は、そんな彼らの復讐劇である。

始まりは無の感情から

全ての原因は今から十四年前、私と彼が一つの決意をした事から始まる。私達だけの決意、それが世界中を巻き込んだのだ。

月明かりの照らす森の中。絶え間なく流れる水の音のみが聞こえるこの空間に、私と彼はいた。私からしてみれば、これほどの至福の時はない。

私達はこの何気ない時間がどれほど尊く、脆く儚いものなのかを知っている。だから、この一瞬一瞬を大事にすることが出来るのだ。いや、しなければならないのだ。

私が守りたかったものは二つ。片方は跡形もなく消え失せてしまったが、もう片方の守りたかったもの――。そう、この何気ない平穏な時間を守りきることは出来たのだ。

ただ、もう片方を失った代償はものすごく大きかった。どこまでもどこまでも負の感情が膨らみ続け、いずれは私自身を壊してしまうんではないかと思うぐらいに。実際に壊しかけたこともあったが。

その時、私を支えてくれたのは彼だった。負の感情に呑まれそうになれば私を救いだしてくれて、絶望の淵にいる私を、生気のある世界へと連れ出してくれた。そんな彼と一緒に過ごすうちに、少しずつ気になり始め、現在は相思相愛と呼べる関係にまで発展していた。

あの事件、大切なものを失った時から1年が経とうとしている。私は、そのことについて関連深い話を彼にしようとしていたのだ。今でもそのことを思い出すと、苦しくなるから思い出さないようにしていたのに。今の私は、そのことを思い出しても平然としていられる。そんな私は狂気に蝕まれているのだろうか？

いや、そんな狂気を平然と観察できる私の心、実は何もないのかもしれない。それを、狂気で飾り付けているだけ。ただ、どちらだろうが今の私にとっては関係のないことだが。

「ちょっと話を聞いてもらっていいかな？」

「別に構わないけど」

彼の答えが返ってきた。彼の優しい、包容力のある声。この声が聞けるのも最後かもしれない。なんだって、私の話は……。

「この世界を滅ぼす方法」

なんの迷いもなく、話したいことを彼に告げる。あぁ、彼が驚いている様子が手に取るように分かる。これのせいで彼の声が聞けなくなるかもとか、彼から見向きもされなくなるんじゃないかとか、そんな邪魔な感情はない。今の私には、これしか生きている目的はないのだから。

そして、これを告げ終わるときには、私は見るも無残な復讐者になり果てることだろう。だろうではなく、なっている。その姿がありありと思い浮かべられる私。周りから見れば私は狂っているのだろうか。彼も、私のことを狂っていると思っているのだろうか。

「……。協力する。君が望むことだもん」

彼の答えに、少なからず衝撃を受けた。その後に、幸福感で満ち溢れる。それでも、最後には無感情に戻る私。狂っているのではなく、やはり精神が壊れてきているのかもしれない。もう、感情などは邪魔にしかならないのだし、それが無くなるなら好都合だ。

私のこの無念が晴らせるというのならば、感情なんていらない。誰からみても同情の余地が無い復讐者でも構わない。最後には命を捨てるのだって惜しくない。

それほどまでに私の決意は重く、意味のあるものなのだから。

リクＳｉｄｅ１　僕の世界の綻び（前書き）

今回のみ、補足させていただきます。

サブタイの前についている、『リクＳｉｄｅ１』とは、特別取らせていただきました緊急措置です。

紹介でもあるように、この小説は視点がコロコロ変わります。そのため、主人公が誰なのかと、混乱を招かないようにしたものです。

１とは、そのＳｉｄｅの通し番号です。つまり、『サンＳｉｄｅ１』などもあり得るわけです。

多分、この説明では説明不足なので、その趣旨の連絡さえもらえれば、メッセージにて説明いたします。

それでは、前置きが長くなりましたが、本編をどうぞ！

リクSide1　僕の世界の綻び

僕は目を開ける。一面に広がる白色の天井が見えるはずなのに、目の前に広がるのはどこまでも高く蒼い空。その蒼はどこか悲しげで、僕を憐れんでいるように見えた。

ふとした疑問が頭をよぎる。何で僕は外で寝ているんだろう。

憐れみに満ちた哀しい空を見上げるのが嫌になり、横を見る。そうするとふわふわした毛皮に包まれたポケモン、僕の友達がそこにいた。それを見て今までの出来事を思い出す。

ここに来る前に何があったか、どうしてここに僕がいるのかを、全部。

それを思い出すと、僕の親友の残した言葉が脳裏を駆け巡る。意味はよく分からなかったけど、頭に鮮明に残っている記憶。そう言えば彼は生きているのだろうか。

――日常の崩壊なんて、考えたこともない人がほとんどだと僕は思うんだ。でも、君らは知っている。日常なんて脆弱な基盤の上でしか成り立っていないことを。それを忘れないでほしい。そして、どうかこの世界を変えてほしいんだ。君の為にも、未来の為にも、ね――

忘れてはいけない気がして、僕は何度も何度もその言葉を頭の中で繰り返す。

このときの僕は考えもしなかった。この言葉が、どれほどの深い

意味を持つのかなんて。

僕がここにいる理由、そのことを話すなら、少し時間を遡らないといけないね。

昨日。ここが僕の生と死の分かれ目だった。冗談や嘘なんかじゃなくて、正真正銘死を覚悟した日。もしもあそこにいなければ、僕らは確実に命を落としていた。

その日は……。そう、小さな幸運に舞い上がって、大きな不幸に呑みこまれた日。そんな日だったと思う。今の僕がそれを証明しているしね。その日のことを今から話すよ。

・

・

・

僕の住む町はスパークシティという。学校で習ったけど、この世界で一番進んでいる国だそうだ。だけど僕は、それよりも周りに溢れる自然の方が良いと思っていた。

光を浴びて輝く川、生命力あふれる森。どれもこれも僕らポケモンが作ったものには無い。

だから、僕はここが好きだ。毎朝登校するときに通るこの道。朝日を浴びている美しい川が僕のすぐ隣を流れ、舗装されていない茶

色の地面が顔をのぞかせているこの道。道の端には健気に生きている草花があり、時々吹く風がその草花をなびかせる。愛おしく、美しい風景だと思う。

この日も変わらない日だった。いつもと同じように歩き、時々川や草花に目をやりながらも、学校で待っている友達のことを考え、つい小走りになってしまう。

この日、いつもと違ったことが一つだけあった。それは、道の端に生えている一つのものに目を奪われたことだ。

そこにあるのは、四つの葉が付いており、他の葉と比べても葉の色がずいぶん違った。他の葉よりも数倍濃いのだ。僕は、溢れんばかりの生命力がこの葉から流れているように感じた。なんというんだろう。生き生きとしていて、自然そのままの姿の象徴のように見えた。

それを何か理解したときにはすでに摘み取っていた。そして肩にかけているバックに入れる。そう、それは願いの叶うと言われている、四つ葉のクローバーだった。

友達に見せたくて、小走りところか、全力で走り続ける。周りの風景を見ていたいという気持ちもあったが、クローバーを誰かに見せたいという気持ちの方が強かった。

走るにつれて、舗装されたコンクリートの道になる。この道はやっぱり好きにはなれない。でも、学校に行くにはここを通るしかないのだから、仕方がない。

学校に着く。全体的に白くて、角ばっていて。やっぱりポケモン

が作ったものは好きにはなれない。

そう思っても変えられないのが現実。僕はしょうがないと思いながら、校門をくぐり中に入る。

中の風景も外と同じ。自然的な美しさがない。何で、何でみんなはこういうのが好きなのだろうか？　僕には理解できない。

など、色々思案しているうちに教室に着く。来る前まではあんなに元気があったのに。今日は色々と考え事をしたせいで、結局元のテンションに戻ってしまった。

扉を開け、教室を見渡す。しかし、親友である彼の姿が見当たらない。もうひとりの親友である彼女はもう来ているみたいだ。席で本を読んでいる。

彼はまだ来ていないのかなと思い、取りあえず彼女にクローバーを見せる。

「ねえ！　これ見て！」

彼女が振り向く。自分で言うのもなんだが、僕はあまり騒がない方だ。そんなポケモンが声を荒げているのだから、反応しない方がおかしい。

「何それ、キーホルダー？」

彼女はメリープという種族だ。黄色いもこもこした毛皮に覆われ、尻尾には黄色い球体が付いている。名前はメグといい、僕の親友であり、幼馴染でもある。

「違う違う。いつもの道で拾ったんだ。なんて言うかね……、神秘的な感じがして」

思ったことを率直に述べる。そうしたら、メグは興味のなさそうな返事をして読んでいた本に目を戻す。

ここが、僕とメグの決定的な違い。僕は自然が好きだ。生命力溢れ、何よりも尊いものだと思う。なんて言ったって、僕らポケモンには造りだせない。“宿り木の種”などの技を使えば、ある程度らしきものは作ることはできる。でも所詮紛(まが)い物。やはり自然に生きる植物とは色も、生命力も、何もかもが全然違う。

メグは学校のような作ったものの方が好きらしい。僕には理解できないが、こういうところの方が落ち着くし、絶対に安全だと思えるからだそうだ。

そんな考えの違いはあっても、やはり僕たちは親友だ。この話題はお互い避けている。今日は僕がしくじっちゃったけど。

「何読んでるの？」

メグがさっきから読んでいる本。表紙を見ても難しくてさっぱりだ。ただ、古ぼけていたり、普段は1ページを一分経たずで読むメグが全然ページをめくらなかったりすることから、古代の文書なのは分かった。

「これ？　古代からある、オーブについてのお話よ。見たことないから今はもう無いんでしょうね」

そう言って、本をこちらに向けてくれる。古代文字びっしりで、僕には全く読めなかったが、絵を見る限り、オーブというものは修飾された台座の上に宝玉が載っている感じだ。その宝玉の色は様々で、赤、黄色、青など、果てには紺色などもある。

「なんだか、綺麗だね」

初めて、ポケモンが造ったもので美しいなと思った。どこか惹かれるものがある。色？　形？　そうじゃない。僕はこのオーブから、感情みたいなものを感じたのだ。

そう、それは自然を眺めるときに感じるようなこと。このオーブからそういったものが伝わってくる。

「そう？　私は不気味だと思うけれど」

……やっぱり僕の感性はおかしいのかな。どうしても周りと一つずれてしまう。

「あ、サンはまだ来ないの？」

とにかく、この話題を変えようと思い、適当に話を振る。時間に鈍感な彼だが、学校を遅刻したことは一度もない。それが珍しく、今日はチャイムが鳴っても来ていないのだ。

「ごめん！　遅れた～」

メグが口を開こうとした瞬間。黄色い体に可愛らしげな耳と、赤いほっぺが特徴的な種族、ピカチュウが入ってくる。彼こそが今話題にでていたサンだ。

サンの顔にべったりとついた汗、そして、荒げている息を見て、かなり急いでたんだなと思う。いつもなら、このくらいの距離どうってことないと言っているサン。さすがに全力疾走で来るのは大変みたいだ。僕は、心配になり、彼のバックから水筒を取り出して渡す。

「あ、ありがとう」

短くそう言って、中に入っているお茶を飲み始めるサン。その飲みっぷりは見ている方も気持ちがよくなるくらいだった……。

「ところで、その本は何？　なんだか古い本みたいだけど」

いつもは本など興味もないサンが、珍しくその本だけには興味を示した。その古ぼけた表紙と古代文字にはやはり惹かれるのだろう。

「さっきもリクには言ったけど、オーブに関する書物よ」

「……へぇ、面白そうだね」

――この時。僕がサンの微弱な変化に気づいていれば、何かが変わったのかもしれない。

どうして気付けなかったのだろう。サンの笑顔は明らかに歪んでいて、どこか陰っていたはずなのに。

どうして気付けなかったのだろう。声の調子も変わっていたはずなのに。

どうして気付けなかったのだろう。サンは僕達に色々とサインを送っていたはずなのに！

そう、今のこの事態を招いてしまったのは、間違いなく僕だ。他のポケモンなんて関係ない。僕がサンを心配するだけで全てが変わったはずなのに。

それが出来なかった。僕はサンの微弱な変化に気付いていたんだ。でも、なんだか触れてはいけない気がした。それはサンにとっては心の奥底に秘めているもので、触れたら二度と友達になれないんじゃないかと思った。

でも、今のこの現状を考えれば、絶対に心配してあげるべきだった。例え友達じゃなくなるとしても、僕の世界が壊れるよりはましだ。例え友達じゃなくなるとしても、二度と会えないわけじゃないんだ。でも、今では、誰にも二度と会えないんだ。

僕を育ててくれた両親。長い時間一緒に過ごしてきたクラスメート。まだ出会って一年しか経っていないけど、親友と呼べる存在だったサン。生き生きとした自然に溢れた僕の街、スパークシティ。

どれもこれも、僕には譲れないもので、全てを守りたかった。でも、そうして選んだ結果は、破滅。

どれもこれも失い、今では隣にメグがいるだけ。ただ、それだけ。

神様、もしあなたのような方がいるのでしたら、教えてください。どうして僕ばっかりこんな目に遭うのですか。どうして僕も一緒に殺してくれなかったんですか。

今すぐ僕を殺して下さい。

リクSide2　小さな世界の消滅

「……」

やはり神様などはいないのだろうか。いつまでたっても体に変化はなく、ただ心地よい風がこの地に流れるだけだ。

そう、神様なんていない。だから、あんなに残酷で、無慈悲で、最悪なことが平然と起こるんじゃないか。

あの光景、朝まで平然とあった愛おしい風景。クラスメートの声や笑顔。スパークシティ全体の命。それが、一瞬で崩れ去る。そんな悲劇が起こるのは、僕が学校から帰る途中のことだった。

その日のメグは、ずっと読書にふけり古代の世界に入り浸っていた。僕には真似できないだろう。

サンはというと、外の景色を眺め続け、時々こちらに顔を向けたと思ったら暗い表情でため息をつく。それをずっと繰り返していた。

そんな日。いつもより場の空気が何倍も重く感じられ、いつもの日常じゃないと思わせるような日。でも、そんなことなど気憂だと思い込み、いつも通りに過ごしていたんだ。

「サン？　帰ろう？」

僕の呼びかけにも反応せず、下校時刻になってもずっと窓の外を

見つめ続けている、心ここにあらずとはこのことだと思った。

「……ん？　あ、帰ろうか」

やっと僕のことに気付いた。帰る支度を始めるが、その動作はどこかぎこちなく、意識が集中していないように感じた。

カバンに教科書を詰めるだけ、ただそれだけの動作を何回もやり直す。何回も何回も。

結局、普通なら一分とかからないことのはずだが、それに三分以上もかけサンは帰りの支度を済ます。

「お待たせ。メグは帰らないの？」

「私はこれをもう少し読んだら帰るわ」

メグの悪い癖だ。集中すると周りのことが見えなくなってしまう。言いかえれば集中力があるということなのだが、どうしてだか授業では発揮されない。

「分かった。リク、行こう」

サンに連れられ、僕は教室を出る。変わらない白い天井に床。それに囲まれた廊下を歩きながら、今日摘み取った四つ葉のクローバーを取り出して眺める。

周りが白色なため、朝よりも深いような感じに見えた。しかし、周りが変わっただけで本当の色は変わっていない。

「ん？　ねぇリク、それ何？」

サンがクローバーに顔を近づけてくる。そう言えばサンには見せていなかった。

「これ？　これは学校に行く途中に摘んだ四つ葉のクローバーだよ」

サンはそれを聞くと、突然神妙な顔をする。何かおかしなことでも言ったのだろうか。

そのまま、何かを考えるような仕草をしている。そうしているうちに四つ葉のクローバーがあった所まで来ていた。

「ここで拾ったんだよ。……ねぇ、サン。さっきから何を考えているの？」

僕の呼びかけにも反応せず、横を流れる川に写る自分の顔を見ているようだった。

今日という日は本当におかしい。いつもはそこまで気に留めない室内のことや、サンの異常な態度。それらは何かの不幸の前触れなんじゃないかと感じてしまう。

それをサンが知っていて……なんてそんな世迷い事があるわけない。どうせ気のせいだ。明日にでもなればすぐに忘れるだろう。

僕が笑いかけて話しかけようとした時、サンの重たい口が開いた。

「ねぇ、リク。ちょっとさ僕の家に来ない？　実は相談があって……」

やっぱり何かあったみたいだ。それを打ち明けるか、ずっと考えていたのだろう。もちろん、仲間の悩みを放置するほど僕も薄情じゃない。すぐさま返事をしてサンの家に進む方向を変える。

サンの家はもう少し前に戻って帰った方が近道だ。でも、僕のことを考えてくれていつも遠回りしてくれる。そんなサンのさり気ない優しさが、短い期間で親友と呼べる関係に至った要因だろう。

「で、相談することって何？　歩きながらでも大丈夫なら聞くよ？」

サンの表情が暗いから、少し軽いノリで質問を投げかけたが、その表情は変わることなく、何かに脅えるような、そして何かに焦っているような表情だった。

そんな表情をずっと凝視するのはお互い体に悪い。そう思い目を前に向けると、たった今学校から走って出てきたであろうメグとばったり会う。肩で息をしていることから見て、相当慌ててたみたいだ。

「あ、あれ？　何でリクと、サンがここにいるの？　か、帰ったんじゃなかったけ？」

息も絶え絶えだ。取りあえずまぁまぁとメグを落ち着かせ、近くにあったベンチで休憩するのだった。

メグが、自分の水筒からお茶を取り出す。よく見れば顔にも汗がにじんでいる。改めて本当に急いでたんだなぁと思った。

一方サンはまだ暗い表情をしている。その顔はさっきより険しい。

迫りくる何かに脅えていて、それに気付かない僕達をもどかしく感じているのかな？

それも世迷い事だ。既に文明の進んだこの都市。好き好んでストーカーなどするはずもない。僕たちは普通のポケモンだ。そんなポケモンをストーカーしていいことなどあるわけがない。第一、監視カメラが街の至る所に付いているのだから襲われる心配など皆無なのだ。

もう少し深く考えようと思った所で、メグが一息つく。どうやら落ち着いたらしい。

「あ、落ち着いた？　ねぇメグ。僕さ、今からサンの家に遊びに行くんだけど一緒にどう？」

相談相手なら多い方が良い。そう考えた僕はメグを誘ってみる。もちろん、この誘いを断る理由もないメグにとっては、何とも都合のいい話だった。二つ返事で了解する。

「じゃあ、早くいかないと遅くなっちゃうね。行こうか」

「そうね。サンも早く行きましょう」

僕達の声は聞こえているはず。なのに、サンは一切の興味を示さなかった。ただただ空を見上げているだけ。いつからそうしていたかも分からない。ただ、空を見上げているだけだった。

「……。あ、ごめん。ぼーっとしてた」

十数秒という表現が正しいのだろう。そのくらいの時間がたった

とき、やっとサンが反応した。

サンも重い腰を上げ、何故か遠回りである僕の方へ歩き出したのだった。

「ねぇ、こっちから行きたいんだけど、いいかな？」

「どうして？」

当たり前の疑問だった。早く家で相談したいのなら、近道を使うという考えに至るのは当然のことだ。なのにわざわざ遠回りをしようだって？　何のために？

「いや～。たまには自然が見たくなっちゃってね。いつも舗装された道路ばっか歩くのもなんか嫌だし、ね？」

……今日という日はおかしい。何もかもが全て。サンの言っていることは若干筋が通っているように聞こえる。でも、僕達がそう聞こえたらいけないんだ。

まず、サンは毎日あそこの道を歩いている。僕と登下校を共にするのだから間違いない。それは疑いようもない事実だ。たまたま今日は通ってなくても、毎日通っているのだからそこまで無理強いすることはない。

更に、サンはメグが異常なほど自然を嫌っていることも知っているはずだ。なのに、そんな空間に彼女を連れだすなんて考え、普通なら思いつかない。

――なら、どうしてサンはこんなことを言っているんだろう？

答えは一つ。それは、サンが普通の状態ではないということだ。

「しょうがないなぁ。メグ、たまには良いよね？」

メグに選択の余地を与えたら真っ向から反対するだろう。それほどまでに彼女は自然を忌み嫌うのだ。

「……」

メグもサンの異常な態度が気になったに違いない。だから無言で肯定してくれた。

「よし、それじゃあ行こう！　リク、メグ！」

先程までのテンションとはうって変わり、サンはハイテンションで舗装された道路を駆けていく。

もちろん追いかける僕とメグな訳だが、元から体力もなく、さっき走ったばかりのメグには辛いようだった。

幸い、メグと出会ったのが舗装道路に入ってすぐのところだったから、早めに地面がむき出しになっている道に出ることが出来た。そこでは、サンが川を眺めていた。

しかし、先程までの暗い表情はない。何か決意をしたような表情で、川を見下していた。

「ごめんごめん。待たせちゃった？」

その時、一瞬何かを感じた。そして、体が急に言うことを聞かなくなる。おそらく、電磁波だ。でも誰が？　後ろでドサリと何か物が倒れる音がする。おそらくメグも電磁波を受けたのだろう。僕も辛うじて立てているのが現状だ。いつ倒れるか分からない。

「……ごめん。本当にごめん。手荒な真似はしたくなかったけど、もう時間が無いんだ。そして、これだけは覚えておいてほしい」

口を挟みたかったけど、相当強い電磁波なのか、口すらも動かなかった。

「日常の崩壊なんて、考えたこともない人がほとんどだと僕は思うんだ。でも、君らは知っている。日常なんて脆弱な基盤の上でしか成り立っていないことを。それを忘れないでほしい。そして、どうかこの世界を変えてほしいんだ。君の為にも、未来の為にも、ね」

日常の崩壊？　脆弱な基盤？　そんなこと、僕は考えたこともないし、考えようとも思っていなかった。

何か、僕とサンの間に薄い膜が現れる。時々バチッという音を立てるから、おそらく電気だろう。

それが現れた直後、目の前が赤く染まる。いや、赤く染まったのではない。周りの草木が、燃えているのだ。

今のはなんの前触れもなかったから驚いた。けど、次に来たのは轟音。それは、落雷の音によく似ている。その後、舗装に使われていたと思われるコンクリート、家の瓦礫、様々なものが吹き飛んでくる。相当恐ろしいことになっているのは見なくても分かる。これには前触れがったって驚くくらいのインパクトがあるさ。

！　サンはどうしたんだろう！　膜が見えたということは、サンは膜の外にいるはず。だとすれば木っ端微塵に吹き飛んでしまうかもしれない。いや、かもしれないじゃなくて吹き飛んでしまう！

サンの心配をする前に、膜が転がり始めた。もちろんそれはあり得ないことだ。電気が転がるなんて、普通あり得ることじゃない。しかも、転がって行った先には川がある。何故か川の水だけは吹き飛んでいない。ここまでは暴風も届かなかったのだろうか。その転がる力に抗えるはずもなく、僕は川に落ちる。

普通なら溺れ死ぬだろう。しかし、あの膜が水を通さないでいるのだ。これは本当に電気なのか？　電気にはとても思えない。

転がって気付いたけど、メグも同じ膜の中にいる。サンだけがこの膜の中にいないで、煙の中に消え去ったのだった。

昨日の記憶、少し思い出せば街が壊滅したくらいのことは分かる。でも、理解したからと言って受け入れられる訳でもない。僕はその真実から目を逸らし、これは夢だと思い込むようにする。

でも……、ここは現実で、実際に僕は見知らぬ所にいて、街はもう無くて、サンは……サンは。

どうしようもないくらい巨大な悲しみが僕を飲み込み、深く鋭く体をを抉っていく。

体には何の痛みもないはずなのに、心はどんどん傷ついて……。

僕は深い悪夢の中へ落ちていくのだった。

チルＳｉｄｅ１　もう一つの惨劇

……遠くで一つ、小さな爆発音が聞こえたような気がした。

しかし、私は久々の帰郷で浮かれていたこともあり、その爆発音を無視して突き進む。

空はまだ青く、太陽は真上にあり、なびく風も涼しい。こんなにのどかならきっと大丈夫。

私の名前はチル。今年の三月までブラックシティにある学校の生徒だったポケモン。それを証明してくれるのは、カバンに詰まっている教科書と卒業証書ぐらいだ。

とある事情で地元の学校ではなく、都会の学校に通うことになっていた私。もちろん家から行くには遠すぎるため、ずっと寮生活だった。

そう言えば連れて行かれた最初の頃はよく泣いてたっけ。今思い出すと懐かしいなぁ。

さっきは友達と別れるのが惜しくて泣いたんだ。私ってよく泣くタイプのポケモンなのかな。

でも、その友達とはまた遊べるし、本当に久しぶりに両親の顔を見れるし、今の私は本当の意味での幸せを握っているのだろう。

目の前に現れる巨大な丘。これを超えれば我が愛しい故郷が見えてくる。

周りの草木も私を出迎えてくれている気がする。というか、緑色がどこまでも続くというのは本当に久しぶりの体験だ。

私は一度振り返り、今まで歩いてきた道のりを見つめる。

ブラックシティでは、何もかもがポケモンが造ったものだった。草木などは見ることさえ叶わない。

その点、スパークシティは本当に素晴らしいと思う。自然との調和した世界的な都市。機会があればまた行ってみたい。

私がスパークシティを訪れたのは修学旅行の時。向こうのポケモン達とも楽しくおしゃべりしたっけ。

……過去に想いを馳せている場合ではない。もうすぐ故郷が見えてくる。私は丘の方に向き直り、そのまま丘を登っていく。もうそろそろ、私の故郷であるスカイツリーが見えてくるはず。

でも、何故か良い心地がしなかった。脳は幸せを理解しているのに、本能で受け付けない。まさにそんな感じ。これは、私特有の不幸の前触れだ。

虫の知らせという言葉がある。その知らせ方はポケモンによってさまざまだが、私は幸せを黙って享受できなくなるのが知らせだ。

今、不幸なことが起こるとしたら、自分の身に起こるか、故郷に起こるかの二択だ。どちらの場合でも故郷を確認できれば問題ない。いや、自分の身が危ないのは問題があるが、故郷に着けばこの知らせも杞憂で済ますことが出来るだろう。

でも、一度でも知らせを感じ取れば居ても経ってもいられなくなってしまう。私は息が切れるのも承知で、急な坂道を飛んで急上昇する。こうすればとぼとぼ歩くよりかなり速い。

「っ……？」

急に視界が開けた。しかし、またすぐに視界が悪くなる。周りが黒く塗りつぶされて、何も見えない。

ごまかすな。これは私が無意識のうちにやったことだろう？　意識が飛ぶのを防ぐため、目の前にある何かを理解させる前に本能で目を閉じる。でも、何で故郷を見たら意識が飛ぶ？　何で何で何で？

目をつぶっていたら真っすぐに飛べるわけがない。いつの間にか私の平衡感覚は失われ、地面に落ちていた。

……息が苦しい。

私はもしかしてと思い、意識して息を吸う。昔吸い慣れた空気が私の肺を包む訳ではなく、何かの焼けた臭いと、形容しがたい腐臭を感じる。

私は平衡感覚が無くなると、どこにでも飛んで行ってしまうらしい。ここはどう考えても故郷じゃない。何もかも全てが違う。でも、何故か目を開けることが出来なかった。必死に本能が引き留めるのだ。

もういいじゃないか私。自分だって薄々気付いてた。目の前に何があるのか、そして、私の虫の知らせが的中していることに。

それでも、本能がそれを拒む。私は、ただ目を開けるというこの動作に、何故こんなに不器用にならなければならないのか。

なんとか開けることが出来たが、目の前に広がっている景色は地獄絵図そのものだった。

私の故郷って、緑に覆われて、真ん中に高くそびえたつ千年樹があって、そこにみんなで暮らしてるんじゃなかったの？

あぁ、私が不幸の前触れをキャッチできた理由が分かった。千年樹が見えなかったんだ。それで、何かしっくりこないものがあって、本能が先に気づいたんだろう。

目の前にあるのは、千年樹が焼け焦げて残った炭と、その周りに横たわるポケモンの姿。

中には体の半分が焼けている者もいた。あれでは呼吸できずに、……これ以上は考えたくない。

脳がやっと活発に動き出す。そして考えることを始める。それは、負の感情を造り出すのとほぼ同等な行為。でもやめられなかった。

悲しい。辛い。負の感情は脳内のダムを決壊させたようだ。体中にどんどん浸透していく。そして、自分を思うように動かせなくなる。

気付けば視界はぼやけている。この意味に気付くのにも、私は多大な時間を要したのだった。

「どう、し……て？」

自然と口から零れた言葉。つい数瞬前までは幸せでいっぱいだったのに、それが一瞬でひっくり返る。

両親の顔。実はあまり覚えていない。最後にあったのは六年前だ。この頃の記憶は曖昧で、誰が私の両親なのか、分からない。

それはあまりに悲しいこと。顔さえ覚えていれば、この数多の亡骸の中から両親を見つけることもできよう。でも、私にはそれすらもできない。

ただただ、その場で泣き崩れるしかできないのだ。

私が考えていたことはいつも一つ。幸せになること。家には両親がいて、外に出れば友達と遊べて、たったそれだけのことしか願わなかった。

それですら叶えてもらえないのだ。きっと私に何か非があるんだ。そうじゃなきゃ説明がつかない。

何度も何度も過去を振り返る。でも、溢れてくるのは友達の優しい笑顔や、覚えていないはずの両親の声。そのたびに自分の胸は締め付けられ、感情が無くなっていく。

……どのくらいこうしていたのだろう。全く見当がつかない。でも、私はとあるポケモンの声で目が覚めた。

「マジか。そいつはやべぇな」

どこから声がするのかは分からない。私の視界はぼやけて霞み、目の前にあるものですら認識できないほどだ。

「それよりも、早く切り上げた方が良いだろ。ここにずっといると怪しまれる」

誰かと会話をしいているみたいだったが、相手の話し声は聞こえない。でも、私はその声を必死に聴き取る。何か大事な、重要なことを伝えてくれそうな気がしたからだ。

「こっちは問題ない。樹を一つふっ飛ばすだけの簡単な仕事だったからな」

その後に、汚く響く笑い声が聞こえる。そして、それを聴き私は悟った。

私の故郷を破壊した張本人がすぐ近くにいる事に。

すぐにでも切りつけたかったが、私の貧弱な体では無理だ。それは自分が一番理解している。

ならば、ここは情報を集めるのに徹するべきだ。幸い、出稼ぎに行くポケモン達も何匹かいる。そのポケモン達と合流出来れば、ここで得た情報は相手を倒す武器になるだろう。

「じゃあ、今後の日程は予定通りだな。それに一つ探し物が増えただけ……、一つじゃなくて二つか。フレアの奴も面倒なことしてくれるぜ」

今の情報を分析する。相手は組織的に動いているグループで、仲

間にフレアというポケモンがいる。面倒なことをしたらしいから、何かしくじったのだろう。そして、大事なことは今後の日程もあるということだ。

これは相手の尻尾をつかめるかもしれない。相手の出没先さえ分かれば先回りも可能だろう。

「それじゃあ通信を切るぞ。サン？　それも探せと。はぁ、フレアは何してんだよ全く」

……サンというのは、おそらくポケモン。そして、私のよく知る親友の可能性が高い。

サンも探されているということは、スパークシティももしかしたら……。

その時、先程の爆発音を思い出す。あれはスパークシティの方から聞こえてきたものではないか？　スパークシティとは近いし、大きな爆発音なら聞こえても不思議はない。

不思議な気分だ。さっきまでは悲しいという感情が体を支配していたのに、今では何事もなかったかのように思考でき、体も軽くなったようだ。

何故だか私には理由が分かる。それは私の成すべきことが出来たからなのだ。復讐という目的が。

気付けば涙も乾き、視界ははっきりしている。でも、既にあのポケモンの姿はなく、目の前残っているのはたくさんのポケモンの亡骸と、私の故郷のなれの果て。

この先、どうやって味方についてくれるポケモンを集めるか。それが私の課題になりそうだ。そして、それが私の生き方を左右する。

人生の決断とはこういうものなのだろう。でも、私は過酷な道を進むのを躊躇わない。

何故なら、故郷や顔も覚えていない両親の復讐を完遂させるため。それが世界中のポケモンを不幸にしようと構わない。あいつらが私の人生をめちゃくちゃにしたように。

気付けば太陽ではなく、月が私の真上に舞い降りていたのだった。

フレアSide1　悪魔

……どうしたらいいのだろう。

目の前にいるのは、シャンデリアのような姿をしていて妖しい笑みを浮かべているポケモン、名前はシャラという。種族はシャンデラだ。魂を喰らい生き永らえると言われているポケモン。しかし、このシャラというポケモンからはそんな野蛮なイメージは抱かなかった。

「もう一度言います。貴方、私と協力してみませんか？」

そう、先程から協力という名の脅迫を受けているのだ。

彼のにこやかな笑みの裏には、余りにもそれとかけ離れた邪悪な笑みが眠っている。そんな気がしてならない。彼には底のしれない奴という形容が一番だ。

だからこそ、この脅迫に答えるべきか決めかねていた。底の知れない奴となんか関わりたくないという感情と、ここで協力しなかったら結局自分の目的は達せられない、だから協力するしかない。と決めつける感情。

この二つがぐちゃぐちゃに混じり合い、今の私がある。

「……もう一度、何をすればいいか聴かせていただけませんか？」

シャラの表情が緩む。もう協力することを決めたんだな、と内心思っているようだ。生憎、私はまだどうするかは決めていない。た

だ、思考するうちに内容を忘れてしまっただけだ。

「いいでしょう。まず、貴方の失態、それを私達がなんとかしてカバーします。必ず成功させましょう。成功しなかったらそこで契約を破棄して構いません。ですが、成功した場合、貴方にもそれ相応の働きを要求します」

そこでシャラは言葉を切る。私はこの先が気になるのに、どうしてそこで口を止めるのか。

ここで私の犯した失態について話す必要があるだろう。

オーブの回収の失敗。それが失態だ。

スパークシティを破壊する所までは上手く進んでいたのだ。見事に街が吹き飛ぶその様は美しいと感じると同時に、恐ろしくも感じた。この組織の軍事力があれば、世界最大の都市でも簡単に破壊できるのかと。

それで、そのままオーブを回収する予定だった。どこに置いてあるかなんて分かっていたし、間違えるはずもない。でもその場所には無かったのだ。

「オーブの回収。それが一番の目標ですからね。達せられてないとなると、どんな処罰を受けるか」

いやらしい笑みを浮かべながら言う。私を袋小路にでも導いたつもりなのか。でも、実際にこいつと協力する以外には打つ手なしだ。

これが立派な取引なのだとしたら、このシャラという奴はかなり

できる。相手に花を持たせて、自ら座らせる。そして、自分の得になるように席の場所を誘導しているのだ。

無駄な抵抗は避けるべき。そして、今、私にできる抵抗はない。なら相手の意のままになるのは不愉快だが、協力するしかないだろう。

「……協力しよう。これからはよろしく頼みます」

「ありがとうございます。貴方が賢い方で助かりました」

協力することを見越したかのような言い方に、私はやはり不快感を覚える。どうやらこいつとは上手くやっていけないみたいだ。

シャラとは前から面識だけはあった。話したりすることもないが、同じ組織にいるポケモン同士、幹部の集まる会議で顔を合わせる程度だった。

それがどういう訳かいきなり接近してきた。私の失態を隠すという名目で。

「それでは。私は会議室の方へ行きますので」

私がずっと黙っているものだから、話すことはないのかと思いシャラは立ち去る。

実際話すこともないし好都合だ。今までのことを少し整理しよう。

まず、この組織の目的。それはオーブの回収。何故だかは分からないが、それを知ろうとも思わない。

今この組織にあるのは、炎と空（ファイアネカイ）の二つのみ。空はバーンが持って帰ってきた。

全て私達のボスであるヘルガーが――名前は知らない。教えてくれないのだ――持っている。

世界に散らばるオーブの数は十七。そのうちの二つしかまだ集めていないのだ。でも、一ヵ月もしないうちにこの成果ではすぐに全て集めてしまいそうな……、そんな予感がする。

そして、私が持って帰ってくるオーブ。雷（プラズマ）オーブが三つ目になるはずだったのだ。だが、先程のやり取りの通り、その任務には失敗している。

この組織のメンバーは、幹部とボスの数だと五人。私、シャラ、バーン、ロップ、そして、ボスであるヘルガーだ。

この中で、私は周りとは違う思惑で動くこともある。それを達するためにこの組織に身を置いているのだ。

その目的は……。やめておこう。これ以上は精神に負担がかかる。

大分記憶の整理がついた。そう言えばそろそろ会議の時間だ。シャラがどう私を庇うか、実に興味深い。

私は軽い足取りで会議室へと向かうのだった。

「何？　水（アクア）オーブの行方？」

なるほど。こうすれば確かに咎められることはない。

「そうです。フレアから聞きましたが現在は逃走中で、南にある湖の方へ向かっているそうです」

アクアオーブはどこにあるかすら掴めていない、まさに隠されたオーブだった。存在を把握したのすらつい最近だ。それまではないものだと思っていた。

「確かに、湖ならありえないこともない……。フレア、そいつを泳がせ、アクアオーブの所在が分かったら報告しろ」

「了解しました」

それにしてもシャラの口はどうなっているのか。よくもおくびにも出さずに嘘をつけるものだ。私にはあんな芸当は到底できないだろう。了解しましたというだけでもかなり緊張したというのに。

「それじゃあ、この場はお開きとする。各自命令通りに行動するように」

ヘルガーが奥の扉から出ていく。あそこにはヘルガー以外は入れないということになっていて、中に何があるかは全く分からなかった。

私はの顔はにやついていたのだろうか。バーンからご機嫌だなと言われて初めてそう思う。

「フレアさん。それでは約束通りこちらへ」

そう呼ばれ、実感がわく。やはり世の中には利他主義のポケモンなどいないのかと。

「それではですね。このポケモンを探してきてほしいのです」

シャラが頼んできたのは、意外にもポケモン探しだった。もっと危ない仕事だと思っていたので少し不思議な気分だ。

「これは……。種族はコリンクですか」

「はい、やはり貴方は頭が良いみたいですね。よく似ています」

誰と？　という疑問が頭をよぎるが、どうせ信用していないポケモンだ。あまり会話はしたくない。

「貴方が壊したスパークシティの住民です。今はどこにいるかも分かりません」

「それを探して来いと。そうおっしゃるわけですね」

シャラは無言でうなずく。しかし、その顔にははっきりと強さが含まれていた。有無を言わせないような芯の強さ。

シャラがこんなにも必死になって探しているポケモンだ。何か重要なポケモンなのだろう。

「よろしくお願いします。私はこれからやるべきことがありますので」

彼に言い渡されていた任務。それは、スカイツリーの住民を全て排除すること。出稼ぎに出ているポケモンも多く、外で噂を聞かれたら防護が固くなりこの先動きずらくなるとのことだ。

私の仕事は、罪のないポケモンを見つけ出し捕まえること。罪悪感の付きまとう仕事だ。

まぁ、いまさらそんなことはどうでもいい。既に私は悪魔だ。目的という名の欲望に忠実に生きる悪魔。

ヘルガーからは特に命令はないため、このことに集中することが出来る。

十五年前の悲劇。今こそそれに見合った幸福を享受するときのようだ。

リクSide3　希望と復讐

悪夢から目が覚める。これは僕史上最悪の目覚めだ。体は至る所が痛み、疲れも全く取れていない。挙句の果てには未だに体が麻痺している。

寝ているとまた悪夢に吸い込まれそうだったので、鞭を振るい体を起こす。近くには川、辺りは深い緑色をした森になっている。どう考えても、僕の住んでいたスパークシティじゃない。

近くにある川で流されてきたのか……。

体は言うことを聞かなくても、生きているだけましなのか？　でも、周りのポケモンはみんな死んでしまったんだ。自分もいっそのことと思ってしまう。

気持ちがネガティブになると考えもネガティブになるというのは本当のようだ。頭の中では何時かの惨劇と、サンが最後に残した言葉が無限に廻っている。

何時かじゃない。それはつい昨日……。いや、一昨日の話だ。そう、二日前には何も知らずに暮らしていた自分の姿があったのだ。

世の中には多世界解釈というものがある。世界は選択肢によって選ばれ、無数に増えているという考え方だ。その選ばれなかった未来はパラレルワールドというらしい。

パラレルワールドには、今も楽しく過ごしている自分の姿があるのかもしれない。

僕自身は何も選んでいない。いつも通りの変わらぬ日常を普通に過ごしていただけだ。それはパラレルワールドの自分も同じだろう。

本当にそうなら、何で向こうの世界は壊れなかったのだろうか？

それは、見えない選択肢が違っていたという可能性しかない。自分では選べない選択肢、そんな所で僕の運命は決定付けられたのだ。こんな、最低な結果に。

自分の無力さを痛感する。と同時に、パラレルワールドを妬ましく思った。

――どうして？　何で私が幸せになろうとすると運命が邪魔をするんだろう――

このセリフが頭をよぎり、ふと思い出す。昔、同じ立場だったポケモンがいたことに。

彼女も現実という名の檻にいて、徐々に精神を蝕まれていった。

今のままなら、僕も精神を蝕まれるのだろうか。彼女はなんとか現実という檻を開け、外の世界で暮らすことが出来たが、それは奇跡と呼んでも過言ではないほどのことだった。

でも、それしか選択肢が無いならば、僕もやるしかない。

檻を開けるには鍵が必要だ。鍵とは目標。目標があればポケモンは何度でも立ち上がれる。

今の僕に最もふさわしい目標と言えば何だろうか……。

おそらく、僕の街を壊した奴への復讐、そして、安全な場所に逃げる事。それしか思い浮かばない。

「んぅ……」

メグが呻いている。悪夢でも見ているのだろうか。

それならば起こしてやらないとと思い、前足で軽く背中をつっついてみる。

「……ん。ここは？」

どうやら目覚めたようだ。何やら辺りを見回している。

「ねぇリク。私が何でこんな所にいるの？」

当然と言えば当然の問いかけだ。自然を嫌うメグにとって、ここは今すぐにでも離れたい場所だろう。

答えようと僕が口を開こうとする前に、メグが自分で気づいたようだ。一昨日の出来事を思い出して、みるみる顔が青ざめていく。

僕にとってスパークシティは住んでいた所という意味しかない。でも、メグにとってはあの土地ほど大事なものは無かったと思う。

それを失った悲しみは僕には分からないだろう。だから、かける言葉を見つけることが出来なかった。

風が吹き、森がざわめき、川が流れる。それらの音は、まるで故郷を無くした僕らを嘲笑っているかのようだ。

それに耐えきれなくなったのか、メグの方から声をかけてくる。

「リク。これから先、どうしよう？」

僕らは生きていく為の術など持ち合わせているわけもない。だから、何もしなければ待ちうけるものはただ一つだ。僕は生憎そうなりたくはない。目標をもった今、生きる必要があるのだ。

「まず、食べるものが必要なんじゃないかな？」

メグが驚いてこっちに視線をぶつける。それもそのはず。今の僕の声は、ありえないほど希望に溢れていて、キャンプに来たような少年を思わせたからだ。

「な、何で……」

メグの言いたいことは分かっているけど、今は答えるより先に食糧を探そう。

「それじゃ、メグはここで待ってて。森は苦手でしょ？　僕がオレンの実を探してくるよ」

後ろでメグが呼びかける声も聞こえたが、無視して体を動かした。無視したんじゃない、無視せざるを得なかった。

未だに取れない痺れのせいで、体は重りを付けられたかのように重く、歩くということにも集中しなければ倒れてしまいそうだった。

――サンってこんな強い電磁波を出せたっけ？――

そんな考えが脳裏をよぎったが、また倒れそうになったので僕はそれを考えるのをやめた。

大体一時間くらいでオレンの実を集めることが出来た。探し始めてすぐにクラボの実を見つけられたのが良かったのだろう。

クラボの実の辛さはどうしても好きになれないけど、そんなことを言っている場合じゃなかったから無理やり口の中に詰め込んだ。今も口の中がヒリヒリする。

今手元にあるのは、メグの分のクラボの実と、いくつかのオレンの実。今日の分くらいはあると思う。

「メグ、クラボの実取ってきたよ。まだ体動かないんでしょ？」

僕を不思議そうな目で見てくる。やっぱり、何故こんなに元気でいられるのかが不思議でならないようだ。

でも、体の痺れは取り除きたいらしくてクラボの実を食べる。そのうち効いてくるだろう。それまでに少し情報を整理しておこうか。

「メグ、少し質問するけどいい？」

メグは特に反応を示さなかったが、肯定したのだと受け取り、話を進める。

「自分の名前と種族、言える？」

さすがにこんなことを聞かれるとは思ってなかったようだ。少し怒っているように見えなくもない。

「メグ。種族はメリープ。あんたはどうなのよ」

「僕？　僕はリク。種族はコリンクだけど」

なんだかメグにリズムを狂わされてしまった。他にも訊ねようとしていたが、今の受け答えでメグが怒っていることを知り、訊ねるのをやめる。

その代わり、メグの痺れが取れるまで一匹で考えることにした。

まず、誰が、何のために、どうやって僕の街を壊したのか。そのうちのどうやっての部分はおぼろげにだがわかる気がする。

響いた轟音と、吹き飛んだ瓦礫。ここから導き出される答えはただ一つ。町の中心で何かが爆発した。

それも、昔聞いた原子爆弾のような絶大の威力を誇るものがだ。

それほどの軍事力を持つならば、個人での攻撃という線は薄い。何か組織的に動いている何者かが仕掛けた可能性が高いだろう。

何のためにかは全くと言っていいほど分からない。まず、僕の街を壊すことによってのメリットが見当たらない。見つかるのはデメリットだけだ。

でも、何か襲った理由があるはずなんだ。組織というものを動かすのはそう簡単じゃない。遊び半分ではまずこういう芸当はできないだろう。

考えろ、考えろ。絶対に理由があるはずなんだ。それが分からなければ、復讐することも逃げることも叶わない。僕の迷走劇で終わってしまう。

そうだ。逆に考えてみよう。どうして街を壊したかではなく、どうして街を壊さなければいけなかったのかを考えるんだ。

そうすると、理由なんて何もないと思っていたことにも、ある程度の理由が見えてきた。

何か、街に不都合なものが隠されていたとしたら……。それならばこの強引な方法にもある程度納得できた。納得できたところで、そいつらに対する怒りは収まらないけど。

それは守られていて手を出せないものか、小さすぎて探せないかのどちらか。僕の街には何も祀ってないから、おそらく後者だろう。

「ねぇ、リク。私の痺れも取れてきたけど」

ぶっきらぼうにメグが声をかけてくる。さっきのことが頭から全く離れないらしい。根に持たれちゃったか。

「……そう？　それじゃあご飯でも食べようか」

僕は自分のすぐそばに置いてあったオレンの実をいくつか持って、

メグの方へ行く。

考え事は明また今度にしよう。どうせ、これから先は終わりの見えない旅路が待ち受けているのだろうし。

無造作にオレンの実をかじる。全ての味が混じって逆に味がしないけど、それが今の僕にはあっているような気がした。

色々な衝撃を受け、今や僕の感情は何に対しても関心を抱かなくなっていた。それがオレンの実の味に似ている。

これから先、向かうあては一つだけあるのを思い出した。

「始まりの森になら、僕のお母さんの出身地なら行けるかもしれない」

メグがマメ鉄砲をくらったような顔をしている。今まで行くあてもなく、待ち構えるのは一つだと思っていたのだろうか。

「それって、本当？」

お母さんは既に亡きポケモンになってしまったけど、幸い始まりの森になら何度か行ったことがある。

だから、メグの問いかけに力強く頷いた。

復讐という生きる目標が出来た今、ここで力尽きるわけにはいかない。

足掻けるだけ足掻き続け、僕の街を壊した張本人を見つけ出す。

そして、……してしまおう。

メグが僕の顔を見て、一瞬だけ恐怖の色に染まったのが見えた。

チルSide2　抗う者

――無い。どこにも無い。

確かにここにあったはずだ。私の母が、自分達の顔よりもこれの場所を覚えておけと言うぐらいだったから、ちゃんと覚えている。なのに何で無いの？

千年樹のすぐ側。そこには防空壕のように掘られた穴がある。いつもならばカモフラージュ用の草がかかっていてばれないようになっているのだが、気付いた時は鋼鉄の扉がむき出しになっていた。

私は何かあったに違いないと踏んだ。燃え尽きたのかもしれないという淡い期待もあったが、そんな甘い考えは捨てるべきだ。疑えるのは全て黒。信用できるのは私自身だけ。

だから、意を決してその中に飛び込む。案の定、あるべきものが無くなっていた。しかも、とてもとても大事なものが。

「スカイオーブが…無い」

口に出して初めて脳が理解するとはきっとこのこと。さっきまでの現実味のない妄想が取り除かれ、代わりに一連の惨劇を繋げて考えることが出来た。

ここを燃やした理由。それはオーブを盗むこと、ただそれだけだったのだ。その為だけにここに住むポケモンは一匹残らず殺された。

犯人は分かっている。そして、私にはそれを捕まえる義務がある。

オーブの守護者として、それ以前にここに住むポケモンの一員として。

ずっと洞窟の中にいたからか息が苦しい。外の不快な空気を吸うのも嫌だが、それは少し遠くの所に行けば問題ない。

遠くの所。その言葉で一つ思い当ることがある。

私は、この先どこに行けばいいのだろうか？

私の住む世界は、私が知っているよりももっともっと広大。それこそ、私の故郷が無くなった事件だって世界からみれば蚊に刺された程度のものなのだ。そう考えると私という存在、それは何なのかという問題にまで発展してしまう。

そうなってしまったら自己否定になるからやめよう。今ここで希望を失えば、めでたくここの屍の仲間入りを果たすのだから。

話を振り出しに戻す。まずは外に出るのが優先だ。その先のことはその都度考えればいい。

思いっきり洞窟の中から飛び出す。そのまま急上昇し、千年樹の見えない丘の一番下を目指した。

いつもなら心地よい風が流れるのだが、周りの熱風と腐臭で、むしろ不快な思いをすることになった。

だけれども、そんな不快な思いはこれから先どんどん経験することだろう。私の人生が険しいのは目に見えている。

そう考えると幾分か楽になり、なんとか丘の一番下まで下りてくることが出来た。

ここは私の人生が狂った場所、なのか。爆発音を聞いてから全てがおかしくなってしまった。

「なら……。進むべき道はこっちかな」

その道は私にとって別れの道だった。

最初に通る時は両親と別れ、次に通るときは友達と別れ、そして今日、私は今まで出会ったもの全てと別れて進んでいく。

ブラックシティに通ずる道。全てを失う覚悟はできている。今は目的を果たす為だけにいるポケモン。両親と故郷の仇を取る。あぁ、仇なんて言葉で自分を紛らわすな。私は故郷を壊したポケモンの組織を同じように壊し、遂行者は私自身の手で殺める。

それは復讐者と呼ぶに相応しい目標。いいさ、それなら復讐者にだってなってやる。

今までは、自分の目的だけで動くポケモンを自己中心的だと思ってきた。でも、それは違ったのだ。そのポケモン達は、目的を遂行するために動いていただけに過ぎない。

私もその中に仲間入りする。遂行者を殺すことだけを考え、動き続ける。

このたった一つの目標だけを心に掲げ、私は全てを失う一歩を踏み出したのだった。

チルSide3　一筋の光

草原が続いていた道から、徐々に舗装された道に変わる。ブラックシティが近づいてきた証拠だ。

ここは二つ目の故郷と行っても過言ではない場所で、過ごした年数は故郷とさほど変わりない。

何故、私がこの道を選んだか。軽い気持ちで決めた訳ではない。スカイツリー出身のポケモンが出稼ぎに出る場合、ここに来ることが大多数だからだ。

何より私に必要なものは仲間。それも、同情や信頼関係の仲間ではなく、明確に同じ意志を持った仲間が必要なのだ。それが同じ出身のポケモンに当たる。

先日この街でしか起こり得ない、一つの問題点が分かった。が、どんなに過酷な道でも進むと決めたんだ。ここ以外あてが無い以上、いまさら引き返せるわけがない。

色々な大きさの高層ビルがだいぶ近づいてきた。種族の関係上、大きさが違うから色々な大きさのものが必要なのだ。

――これからは気を引き締めなければ。と思った瞬間、何かの気配を感じ取った気がした。

それは、今ほどまでに緊張していなかったら感じなかったであろう微弱な気配。それでも、体中が熱くなっていくということは、その気配に含まれていたものは一体何だったのだろうか。

私はそれが何か分かっている。だって、それは私と同じ感情を抱えていたのだ。

怖い。単純にそれだけが体中を駆け巡る。自分の持っている感情と同じはずなのに、怖い。それは、何年も何年も重ねられてきた感情だから？　それとも、私よりももっと深い深い……復讐心だから？

それを考えた後、その場を飛び出すまでには時間を要しなかった。

この街ではポケモンの往来が非常に激しい。だから、飛ぶことのできるポケモンでも原則歩くことを義務付けられている。

高いところを飛べばいいじゃないかという意見もあったそうだが、そうしたら上空での衝突事故が多発したそうだ。もちろん、重力があるから……。この先は言わないでおく。

往来が激しいという理由から、この街のメインストリートは身を隠すのにぴったりの場所だった。

更に、ここはいわば通学路でもあり、私のいた寮と学校を結ぶ道でもあった。だから、ここにある建物はおおむね分かる。その中に小型ポケモン用のホテルがあったことも。問題は、学校に通っている下級生の目につく可能性があることぐらいか。

ちなみにここのホテルは、窓が付いていて小奇麗にまとめられたホテルだ。一度は行ってみたかった記憶がある。

私の狙いは身を隠すことだ。杞憂かもしれないが他のポケモンに狙われている可能性がある以上、安易に外を出歩く訳にはいかない。そうじゃなくても夜間は出歩けないのだが。

さっきから自分でも可笑しいと思っていた。だって、不安を取り除こうと第三者の視点で自分を語っているんだもの。

そのことには気付いている、分かっている、理解している。でも、難しい言葉で自分を修飾しないと、涙が止め処なく溢れてしまって、あの時のことを思い出してしまいそうになる。

「こちらになります」

不意に響いたこの言葉が、私を頭の中の世界から引きずりだしてくれる。

「分かりまし、た」

涙声にはなってなかったが、頭がぼーっとして上手く喋れない。変に思われて探りを入れられないことを願う。

気付いたらチェックインを済ましていたみたいだ。部屋が空いていたのは本当に幸運だと思う。

そして、こんな幸運の目があるごとに、何故あの時は不幸の目が出てしまったのかと嘆くのだ。

このホテルの部屋は私にとって不備はなかった。部屋から出ずに生活出来ればそれでいい。

私は先程からこの街のポケモンを信用していない。否、出来ないのだ。これが先程上げた問題点。この街独特の制度のせいだ。

ここに出入りするポケモンは多い。もちろん他の所から色々なポケモンが来るからだ。スカイツリーから出稼ぎに出るポケモン達も、その中の一員だった。

ここら辺はよく分からないのだが、ここで事件などが起こると被害者ポケモンの出身地の法律が適用されるらしい。

これが今の私をどれほど苦しめているかが分かるだろうか。普段ならば、どこもあまり法律は変わらないため問題はないのだが、今の私には守ってくれる法律が無い。つまり、私には何をしてもいいということになる。だから安全にいられるホテルが必要だったのだ。

ちなみに、この法律が制定されたのは私の故郷が壊されたのと同じ日で五日前だ。何とも皮肉な話だと思う。

テレビをつけてみると、今まさに私の所の惨劇についてニュースをやっていた。当たり前だ。ことはかなり友好的な付き合いをしていたのだから。このくらいの期間は放送して当然だろう。

でも内容を聞いた瞬間、私の背筋は凍った。そして、もう一つの重大な意味に気付き、体中が凍って動かなくなった。

「繰り返しお伝えします。ラヴァビレッジより、スカイツリー、およびスパークシティ出身のポケモンを見かけたら至急連絡するようとの伝達がありました」

「記憶にも新しい、二つの街を襲った惨劇は、内部からの犯行の可

能性が非常に高いそうです。見かけたら即刻警察に通報してください。また、それらのポケモンとは間違えても関わりを持たないようにお願い申し上げます。繰り返しお伝え……」

何なの、これ？　今まで仲良くしてきたんじゃないの？

何で手のひらを返されるような仕打ちを受けるの？

どうして私ばかりに不幸が訪れるの？

何でどうして、何で、何で……。

ベットが無ければ床に泣き崩れてた。でも、ベットがあったからそこに飛び込む。ベットの柔らかさだけが今の私を癒してくれるものだった。

私がより添えるポケモンは次々と消されていく。親友の家にでも入れてもらおうかとも思ったけど、みんな私がスカイツリー出身なことを知っている。

友情が壊れるなんてことは信じたくないけど、ただの親友に命を預けるのはあまりにも無謀だ。

「新たな情報が入りました。特徴として、スカイツリー出身のポケモンには飛行タイプ、スパークシティ出身のポケモンには電気タイプが多い傾向にあります。これらのタイプのポケモンを見かけたら、即刻通報するようお願い申しあげます。なお、通報された方には賞金の贈呈があります」

さらなる衝撃が体中を走る。それは凍りついていた私を溶かすに

は十分なもので、すぐに行動を始めるられるようになった。

一般的な教養、それもスパークシティに次ぐレベルの教育を行っているここなら、私の種族が飛行タイプだってことぐらい知っている。

そして、私は見られているんだ。このホテルの従業員に。すぐに気付いて捕えに来てもおかしくない。

涙が流れている目を拭う。でも、いくら拭っても収まる気配が無いからそのままにしておいた。

頭にオレンジ色のリボンをつける。これは大切なポケモンからもらったもの。これを失くすのは絶対に嫌だ。

これで準備万端だ。食糧はその都度調達していたから持ち合わせはない。もちろん鞄などは必要ないから捨てていき、軽い体で窓枠を蹴って外へ飛び出す。

料金など払うつもりもなかったのが幸いした。タダで泊まった後、窓から逃げ出せるようにと窓がある所を選んだのだから。

逃げ出した空から見下げた景色は、まさに地獄絵図だった。

空を飛べるポケモンは飛んで逃げようとするも、技をくらって撃ち落とされる。足に自信のあるポケモンは走って逃げようとするも、先回りされ捕えられる。

いつ私にも攻撃が飛んでくるか分からない状況だった。

すぐに高度を上げ、なるべく技の範囲に入らないようにする。飛んできた技は全てかわしていた。

でも、信じられない。あんだけ優しくしてくれたここのポケモン達が、賞金につられ、街のポケモンを倒している。

私は知っている。このポケモン達が本当はどんな感じだったかを。でも、それと今の景色が重ならない。こんなに獰猛なここのポケモン達など見たこともないんだ。洗脳されてしまったのかと思えるほどだと思う。

悲しい、という感情は何故か湧いてこなかった。その代わり、憎たらしいという感情が心を渦巻く。

あの中には、きっと違う出身のポケモン達もいるはずだ。それでも、見境なく攻撃する街のポケモン達。どちらが悪いかなど目に見えている。

だから、彼らが憎たらしい。無実のポケモン達を捕まえ、警察に連れていくその姿が。今すぐにでも倒してやりたいくらいだ。

でも、と続けようとしたら、突然体の自由が利かなくなる。

念力だった。体は全く動かないのに対し、高度は全く下がっていない。

いつまでたっても高度が下がらないことを疑問に思い始めた頃、急なスピードで高度が下がった。

……あぁ、このまま地面にぶつける気か。それなら好きにすれば。

自分の人生が終わるのを感じながら、どこか安心していた気がする。これでもう辛い目に遭わなくて済むのかと。

私の生きた幸福に包まれた十二年間と、絶望の中必死にもがいた五日間。それは誰にも知られることなく、ここで終わる。

さようなら、私。

チルSide4　情報屋

私は生きているのか死んでいるのか。それすらも分からない暗闇の中にいた。

今残っている最後の記憶は、念力で固定されまっさかさまに落とされたということしかない。それが本当なら、死んでいる。あの高度で、あのスピードなら助かる確率は限りなくゼロに近いのだし。

そっか、私は死んだんだ。やっとあの悲しみや復讐心、裏切られる絶望感から解放されたんだ。

それは嬉しいような悲しいような……。よく分からない感情だった。苦しみから解放されて嬉しい。でも、家族の仇を取れなかったことが悲しい。

思えば私の十二年間はなんだったのだろう。ただ勉強しただけじゃないか。何も残せやしなかった。

名前を残すところか、生きていた証を全て消された私。愛すべき故郷に家族、慣れない寮生活の中作った友達。誰も私の名前なんて覚えてくれてないだろう。

悔しい、もう一度やり直したい。今度は誰か一匹でもいい。自分の生きていた証というものを誰かの心の中に残したい。

心に願ったその瞬間。暗闇の中に一筋の光が舞い降りてくる。その光は瞬く間に広がっていき、暗闇が全て消え去った。

「やっと起きた？　助けるのも大変なんだから。お茶でも淹れてくるね」

気付いた時は、ベットの上だった。今のぞきこんでいる彼女が助けてくれたのだろう。

まずは自分の頭につけているリボンをチェックする。これだけは絶対に失くしてはいけないのだ。何が何でも。

――良かった。ちゃんとついている。

安心したのもつかの間。ベットから見下ろせるように備え付けてあった窓から外を見てみると、ここはまさしくブラックシティだったのだ。さっきまで命が狙われた場所、そして、最後の希望だった場所。

「淹れてきたよ。これでも飲んで落ち着いてね」

特徴的な二股の尻尾と額に埋め込まれているその宝石。そのポケモンは全体的に桃色の体をしている。種族はエーフィに違いなかった。

「……ありがとうございます。お名前をうかがってもよろしいですか？」

心の中に、もしかしたらという淡い期待があった。私がここに来た目的、そう、二つ目の目的を叶えてくれる存在かもしれないという期待が。

「私の名前はネオ。裏では少し有名な情報屋をやっているのよ」

私が探していたポケモンの名前とは一致しない。私が探していたポケモンはアルト。種族は分からないけれど、ネオさんと同じ情報屋を職業にしていたらしい。

少し考えて、一つの結論にたどり着いた。彼女も腕が立つ情報屋だ。それならば私の求めている情報を持っているかもしれない。

「ネオさん。スパークシティに住んでいる……。いや、住んでいたピカチュウのサンというポケモンについて、何か知ってませんか？」

サンは私と同じ境遇にあるポケモン。そして、幼い頃から一緒に遊ぶ仲だった親友。それは、私が生きていたことを証明してくれるポケモンだ。彼がもしあの攻撃に巻き込まれているとしたら……。本当に私を覚えていてくれるポケモンはいなくなってしまう。

「そのオレンジのリボン、大事そうにしてるよね。もしかして次期守護者になるはずだったチルさん？」

何故それを知っている？　彼女は私の質問に答えてくれるどころか、それ以上の答えを示してくれた。

ネオさんは多分、この世界の裏事情にかなり精通している。守護者のことを知っているとなれば、オーブのことも多分知っているだろう。

「そうです」

私が短く答えると、やっぱりといった表情を見せる。その表情に、私は少し煩わしさを覚えた。サンのことについて、何も答えてくれ

なかったからだ。

「ごめんなさい。そんな顔しないでよ。サンについてなら教えるから」

不快感がそのまま顔に出ていたようだ。少し自分の素直さを恨む。

「サン、彼も守護者だったね。しかも街が破壊されたというのに、オーブが盗まれたという情報は入ってない。私は彼がまだ生きていて、どこかに逃げていると考えている」

サンが生きている、これ以上嬉しいことはない。でも、私達の身に起こった不幸が無ければ、これは当たり前のことなのだ。その当たり前すらも素直に享受できないなんて、そんなのはあんまりだ。

でも、逃げているということは追われていることの裏返しだ。やっぱり狙いはオーブか守護者なのか。相手の目的が分かっただけでも十分な成果だ。

「ありがとうございます。それよりも、ネオさんはいったい何者なんですか？」

「ただの情報屋。それ以上でも以下でもないわ」

守護者のことやオーブのことを知っているポケモンが、普通の情報屋なんてありえるはずが無いんだ。表に出ることなど無いオーブのことを知っているだけでもおかしいというのに、既に普通のポケモンと区別のつかない守護者まで把握しているなんて。絶対にあり得ない。

説明をつけるならば、ネオさんが守護者の親戚にあたるポケモンという可能性ぐらいしかない。

確か、氷(アイス)オーブの守護者はグレイシアだったはずだ。親戚関係という可能性も拭えない。

とにかく、私にとってネオさんは貴重な情報源となりえる。私も守護者の立場に立ったことはないから詳しいことは知らない。言われていたことは「オーブだけは必ず護れ」と言いつけられてたくらいだ。

それに対し、ネオさんはかなり詳しいところまで知っているようだ。今後も連絡を取っていきたい。

「話は変わりますけど、この先連絡ってどうやったら取ることが出来ますか？」

一瞬、ネオさんの視線が鋭くなる。今まで静かなポケモンだと思っていたが、今の視線で覆されるぐらいの鋭さだ。あまりの鋭さに少し身震いする。

「情報は仕入れるけど、情報を渡すのは好きじゃないの。ごめんなさい、この先会うことはなさそうね」

語尾からは多少の怒りを感じ取ることが出来た。何に対し怒っているのだろうか。私には見当もつかない。

しばしの沈黙が流れる。その間もネオさんはさっきの視線のままだ。どちらも話すことはないのだが、私は何をすればいいのか分からない。ただ、ネオさんの視線を浴び続けるだけだ。

だって、突然念力で落とされて今に至るのだ。どこへ行けばいいのか、それ以前に外に出れるかも危うい。そう言えば、ネオさんが私を落としたのだろうか。

そうなると、助けるのも大変という言葉は少しおかしい。ネオさんが落としたなら助けるもなにも無いじゃないか。

「ネオさん。最後に、最初に言っていた私を助けたってどういう意味ですか？　ネオさんが私を落としたんじゃないんですか？」

ネオさんの視線が少し和らぐ。何かに納得した様子だ。私の体も身震いも止む。

「あなた、ラヴァビレッジのポケモンに捕まりかけてたのよ。オレンジ色のリボンをつけてなかったら、今頃どうなっていたかしら」

私が捕まりかけていた？　それはつまり、狙いはオーブじゃなくて守護者ってことなの？　それともただ単に飛行タイプだったから？

せっかく頭の中でまとまりかけていた欠片が、音を立てて砕け散る。敵の目的が全く分からない。

それと同時に、サンにもらったこのリボンが無かったらと思うと、体中から汗が噴き出るような感覚に襲われる。私はサンに助けられたのだ。

そう、助けられた。私は何もしてあげていないのに、助けられた。

私は、これから私はサンを探そうと思う。助けてくれた恩返しを

するため。そして、これから私とサンでラブァビレッジの謎を解き明かすため。

復讐という目的もあるが、それを実行するにはあまりにも情報が少なすぎる。まずは少しでも情報がある所から手をつけていくべきだ。

とにかく私に足りないものは、仲間と情報。この二つを得るためにここに来たのだが、ここではもう動けるような状態じゃない。

「困ってるみたいね。私が街の外まで送ってあげようか？」

ネオさんは本当に優しい。私が口に出さなくてもいいたいことを分かってくれるみたいだ。でも、今の私を街の外に連れていくのは非常に困難だ。

「嬉しいですけど、どうやって？」

「簡単よ。深夜抜けていけば誰にも見つからないわ。気付いてないかもしれないけど、あなた、もう一夜ここで過ごしてるのよ？　夜に誰もいないのは確認済み」

ということは、今は落とされた日ではなくて、その次の日の夕方という訳か。そう言えば、昨日の地獄絵図に比べて大分落ち着いている気もする。それでも、見回りのポケモンがいたりと、前の風景とは程遠いが。

「嫌なものよね。ポケモンって情報一つでここまで変わるんだから」

ネオさんの放った独り言は、私の胸に響くような言葉だった。今

まで仲良くしてきたこの地のポケモン達にも、ラヴァビレッジの情報1つですぐに裏切られてしまった。

どこか進んでいる国として、私達の国を見下してたのだろうか。そうならば、今までの友好関係は何だったのかと言いたくなる。

「深夜になるまで少し寝てなさい」

私はその言葉を聞きながらも、ずっとブラックシティとの関係について考えていたのだった。

チルＳｉｄｅ５　運命の日

街の外は夜だから闇に包まれている。ブラックシティの方を振り返れば光で溢れかえる街並みがあるのだが、これから進む道は私が進む道のように真っ暗だ。

スパークシティからじゃないとすれば、ここの予備電力が底を尽き次第、この明るさも消え失せるのかな。

そう、スパークシティが破壊されたことは、こういう街にとっては致命的なのだ。

夜使っていた電気のほとんどがスパークシティからのもの。電気が無ければ、夜に光るものは月と星くらいになる。

世界中の電気が消え失せ、夜は静かになる光景を想像するのは容易い。それは犯罪者が動くにはとても都合が良い環境だということも簡単に予想できる。

私もその中に紛れ、生活することにあるだろう。今の状態では街を出歩くなど出来たものではない。

「ネオさん。外まで連れてきてもらってありがとうございました」

とにかく、私がこの街を抜けられたのはこのネオさんのおかげだ。お礼だけは言わねば、と思い感謝の言葉を述べる。

「いいよ。私もこの街を出る途中だったし。それに、あなたの目的が添い遂げられるかも凄く気になってるのよ。街を壊した実行者を

倒せるのか、否か」

ネオさんはそっと微笑み、今のセリフが冗談だったことを教えてくれる。本気で私が実行者を倒せるかは、あまり気になってないみたいだ。

――？　でも、何か違和感を感じた。ネオさんの表情もにこやかで、会話の内容にも不自然なものはない。どこで引っかかってるんだろう。

分からない。何か、重大なことを見逃してる気がするのに。分からない。

いつまでも同じことを考えていても話しの流れが止まるだけだ。私は羽を伸ばし、今の話を無かったことにして、話題を変える。

「それじゃあ、ネオさんはどちらへ行くんですか？　私はスパークシティ周辺で、サンを探そうと思ってますけど」

「そうなの？　私は光が残ってそうな所、ラヴァビレッジに行こうと思う。道的には正反対ね」

ラヴァビレッジは、スパークシティの電力に頼ることなく、自分達の炎を使って街を照らしている。こういう事態になったから、おそらく蝋燭（ろうそく）などの価格は右肩上がりになるだろう。

「そうなんですか。それじゃあ、私はもう行くので」

「もう会うことはなさそうだけど、ラヴァビレッジに滞在した後は海を渡るつもり。会いたくなったら会いに来てね」

ネオさんは意外にお茶目なのかもしれない。少なくとも、冗談を言う回数は多いみたいだ。

そんなネオさんはさておき、私は私の道を進み始める。一寸先は闇の世界。私の境遇と同じだ。そんなの、何も怖くない。

前が見えない状態で飛ぶと、朝になった時にどこにいるのか分からないことが多々あるので、今は歩いている。

もちろん、飛ぶに比べれば遅いのだが、足跡が残るから、もし違う道を進んでいても戻ることが出来る。

「それにしても、本当に電気が通ってないんだ」

どの道の脇にも置いてあった、ライトがついてないのを見て、改めて実感する。

こんなことをして、被害を被らないのはラヴァビレッジに住んでいるポケモンだけだ。

そこで一つの仮説を立てる。ラヴァビレッジに住むポケモンが犯人なのだとしたら。

それを想像するのは難しくない。スパークシティを壊しても被害を被らない、街の破壊に爆発物を使った、電気タイプと飛行タイプのポケモンの中に犯人がいると言い出したのもこの街のポケモン達。

これ以上証拠はいらないだろう。犯人の目星が、ついた。

「ご明答。確かにあなたの街とスパークシティを破壊したのは私達です」

すっと、背後に現れた気配。声は低い、だが恐怖感を感じさせる感じではなかった。

「誰！？」

もちろん、私はすぐに振り返る。目の前にいたのはシャンデラというポケモンだ。種族は、炎とゴースト――！

「自己紹介しようと思いましたが、知ってるんですね。シャンデラの種族のことを。それなら話は早い」

考えが読まれているということに気づくまで、少し時間がかかった。だって、そんなことありえるはずが……。

「あるんですよ。世の中には他のポケモンの頭を読めるポケモンだっているんです」

……。考えはお見通しってことか。

「じゃあ、お前が私の街を壊したの？」

なるべく、威圧感が出るように言ってみるけど、この考えもお見通しなのか。

「本当は怖いんでしょう？　そんな強がらずに」

確かにこいつの言う通り、今は逃げ出したいほど怖い。ただ、そ

れと同時にこいつらを倒さなければという感情もある。

この感情が混ざって、この震えが恐怖からくるものなのか、武者震なのか、見当もつかない。

「あなたは私を倒そうと考えてるみたいですね。それも好都合です。ただ、冥土の土産くらいは差し上げましょうか。好きなことを一つ聞いていいですよ」

つまり、ここにいたら殺される。でも、逃げた所で追ってきて殺すのは目に見えてる。なら、情報を掴んであいつを倒すのが私の生きる唯一の道！

「お前達の目的は何？　それだけは聞いておきたい」

「ふむ。目的は、この世界の存在を消すことですね。不条理の多いこの世界を捨て、もっと平等で素晴らしい世界を造ります。その為に、私達はこの世界を壊そうと思います」

世界を壊すこと？　もっと利己的なものを想像してたのに、この解答はなんなんだ？　何も分からないじゃないか。しかも、世界を壊す方法なんてあるはず無い……。

「その壊す方法は分かってるの？」

「質問は一つだけです。まぁ、あなたは幸せでしょうね。こんな世界からおさらばできるなんて。向こうの世界で楽しんでいてくださいよ」

来る。そう直感的に思った私は、思いっきり右に飛び出す。

シャンデラの体から発される光はここまでは届かない。だから、勘で避けるしかなかった。

「っと、避けられましたか。せっかく私の得意技を使って仕留められると思ったんですけどね」

もちろん、避けた次の瞬間にはシャンデラに背を向けて飛び出す。この早さなら追いつかれないと確信していた。シャンデラという種族が素早いということは聞いたこともないし、これしか私の死の運命から逃れられる道はないと思って、後ろからの攻撃など全く気にも留めなかった。たまに体をかすめるが、死ぬよりはましと思える程度のダメージだった。

私の周りを通り抜けていく火の直線も止み、避けきったかと思って振り向く。そこにはシャンデラの姿はない。もうどこかへ消えたのだろう。

「良かった……」

自然に安堵の息が漏れる。既に全力で飛び続けて息が上擦っていた私は、その場に倒れ込もうとした、その時だった。

「だから言ったじゃないですか。私は他のポケモンの考えていることが分かると。何故安心した時に狙われるという理論に至らないんでしょう？」

今回で何度目だろう。死を覚悟したのは。今までは運良く逃れることが出来ていたが、今回ばかりは無理。

「はい、これでスカイツリーのポケモンは殲滅です」

後ろで他のポケモンと通信する声を聞きながら、私はあいつの放った炎に身を焼かれていく。身を焼かれるなんて初めてのことだけど、今まで受けた一番の痛みより、段違いなものだ。言葉で形容なんてできるはずが無い……。

「次は……ですか。そしてビ……と……」

炎は強くなっていく。何かあいつが言っているが、聞きとることもできない。

最初は逃げようともがいていたのだが、今はそんな気力も体力もない。ただ、この炎に身を委ねるだけだ。痛みも遠のき、そろそろかなと自分でも思っている。

誰か、私のことを覚えておいてくれるかな。

無理だろうね。私が両親の顔を覚えていないように、誰も私みたいなポケモンの名前なんて覚えてくれるはずが無い。

サン、私は助けられてばかりだったけど、ついに恩返しはできなかった。また会えたら、絶対に今までの恩を返すから。それまで待ってて。

「後は衰弱するのみでしょう。それを見るのもまた私の楽しみです」

そう言い、あいつは炎を消す。確かに、私の体では動けるはずがなかった。このまま、誰にも知られずに消える。あいつらの目的を誰かに教えることだってできない。

ただただ、悔しい。何もできない無力な自分が。今となっては、こいつに鑑賞され続けるだけの玩具になり果てている。

「助かる方法を探すタイプじゃなくて、死を受け入れるタイプですか。こういうのは見ていても面白くないんですよね」

そう言い残してあいつは去っていく。私はただ暗闇の中一匹で取り残される。

今思えば、いつも私は一匹だった。学校の友達だって、心の底から仲良くしてくれたポケモンがいたなんて思ってない。種族が違うからっていう理由で小さいときは話にも混ぜてもらえなかった。

スカイツリーに帰れば、私にだって友達が出来る。そう思っていた私は学校は勉強するためだけの場所だと割り切り、勉強にだけ力を入れるようになった。

もちろん、そんなことをすれば成績はウナギ登りだ。それを見たいくつかのグループが、勉強を教えてもらうためだけに私に近づいてきたりもした。

もちろん、まだ子供だった私だ。ただ友達が出来たことが嬉しくて嬉しくて、がむしゃらに勉強を教えていたと思う。そいつらだけが上辺だけでも友達をしてくれた。そのおかげで学校の休み時間は孤独を味わなくて済むようになった。

卒業式の日だって、両親は来ちゃくれない。どんな行事にでも参加しない両親だ。入学式に来なかったときから察しはついていた。

でも、次の日にはここを出て、スカイツリーでたくさん友達を作れる。そう思っていたという意味では、学校で過ごした日々の中で一番幸せな日だったかもしれない。

でも、いざ帰ろうと思ったら、上辺だけの友達が中学の勉強も少しは教えてほしい、教えなければ帰らせないという脅迫を受け、そいつらが中間試験で学年トップを取れるレベルまで勉強を教えた。もちろん、私自身は中学に行ってないから、そいつらの教科書を見て一生懸命理解した。

それで、帰ったら街が壊されていたのだ。あのとき感じた無力感は私以外には絶対分からない。顔も見せなかった両親だけれど、小学校に行く前は優しくしてもらえてたと思う。そうだよね？

と思う、という語尾にしなければ、両親のことを語ることもできないこの気持ち。ずっと孤独に生き続けてきたこの気持ち。何もかもが奪われ、命までも失いかけているこの気持ち。誰にも理解できない。いや、誰にも理解させない。

一筋の光もない、この運命に抗えるわけでもない。そう、私は無力。

私は、このまま消えるのが正しいんだ――。

フレアSide2　夢と過去

夢？　これは夢なのか？

今目の前に映し出されている光景は、スパークシティが消え去った今、もっとも発展しているブラックシティが壊されている光景。

壊すというのは、直接的な表現を避けた言い方だ。実際はそれ以上のことが私の目前で行われている。

常識ではありえないような威力の技を使い、建てられている建物を全てなぎ倒していく。それをたった三匹で行っているのだから驚きだ。もちろん、住んでいるポケモンへの配慮などはなされていない。ただ、壊し続けていた。

その攻撃の流れ弾が当たりそうになった瞬間、目の前がフラッシュし、湖の映像へと切り替わる。

そこにいたのは、一匹のイーブイと一匹のシャワーズ。彼らは湖の近くで遊んでいる。とても仲がよさそうに見えるが、シャワーズの放った言葉が聞こえてくると、そんなことを考える余裕などなくなった。

「ねぇフレア。将来やりたいことってある？」

フレア？　もう一匹のポケモンはフレアというのか？　私と同じ名前じゃないか。しかも、瞳の色が私と同じだ。これは偶然とは思えない。

でも、私はあんな湖に行ったことなど無い。正真正銘のラヴァビレッジ生まれでラヴァビレッジ育ちだ。

私が頭を回転させていると、目の前の光景がまた一瞬フラッシュする。すると、やはり次の光景へと切り替わった。この光景では、ちょっと洒落た庭にいる、よく知らないポケモン達が連れ去られている最中の映像が流されている。

助けたい――。と本能的に思って前足を前に踏み出そうとするが、体が鉛のように重く動かない。

私が体を動かそうと必死になっている間だって時間は止まらず、そのポケモンは連れ去られてしまった。視界からそのポケモン達が消えた後、とても酷い頭痛に見舞われる。

今までの痛みに形容できるようなレベルは既に通り過ごし、考えるのも困難なくらいの頭痛が今の私を襲っている。でも、頭に前足を持っていくこともできなければ、頭を下げることもできない。体は固定されたままなのだ。

既に先程の景色は消え失せ、暗闇の中独りで取り残されてしまった。この痛みだけがこの中で時間が進んでいることを教えてくれる。

「――わぁ！　……？」

痛みに耐えて何分経っただろうか、もしくは何秒だったかもしれない。痛みのせいで時間の感覚も曖昧だ。

とにかく、さっきのは夢。私と一切関係ない、ただの悪夢。だって、自分はあのシャワーズなんて知りもしない……。知らないよね？

あの夢を見る前には知らないと断言できたが、今の夢で頭の中の記憶が揺らいでいる。知らないと言い切りたいのに、それをしてはいけないと頭の中で警報を鳴らし続ける自分がいて、どっちを信じればいいのか、分からない。

さっきから、しっかりと地面に足が付いていないような、そんなふわふわした感じ。記憶のどこか、大事なところが抜け落ちていて、今の自分には自信が持てない。

でも、何で？　夢を見る前と記憶は全く変わっていない。それなのに、夢を見る前には自信を持つことが出来た事にも、今じゃ自信を持てない。

何か、何か大事な所だけが抜けている。私の子供の頃の記憶、それが抜けている。それが思い出せなければ、私は一生自分に自信が持てないだろう。なんて言ったって、私がどこ出身のポケモンなのか、それがはっきりしないのだ。

夢を見る前はラヴァビレッジ出身だと思ってた。でも、あのシャワーズを見てたら、どうも違うような気がしてきたのだ。

私の種族はブースターだ。シャワーズは私とは違う進化を選んだポケモン。そういう位置づけになる。

でも、元をたどればイーブイというポケモンに辿りつくのはどちらにも言えることだ。

――そうか。私の記憶が何故曖昧なのか分かった。私には『イーブイの頃の記憶が無い』から、出身や昔出会ったポケモン、そう言

ったものを深層心理でしか感じることが出来ないのだ。

だから、ラヴァビレッジ出身だと思ってたけど、違う。それは他のポケモンから聞いた情報だ。私の感覚を信じるならば、私の出身は森がある所だ。木々には懐かしいものを感じることがある。

そう。この感覚を大切にしていけば、過去の記憶を取り戻すこともできる。そこに、きっとシャワーズと遊んでいた時の記憶もあるはず。

違和感を感じる過去の記憶は、全て嘘。自分の感覚だけを信じ、過去に埋もれてしまった真実を導き出す。

その真実を全て知った時、今の私から離れることが出来る。そんな感じがする。

正直に言って、この組織から早く抜けたい。私にはなんの罪のないポケモンを殺すなんて芸当、出来ないもの。

いつもは悪魔を気取って、感情を表に出さないようにしてるけど、そんなことをしても辛いものは辛い。この感覚は本当だ。信じていい。

でも、その気持ちとは裏腹に、私の目的を達するためにはこの組織に残る必要がある。

私の目的、それは火オーブ（ファイアー）をヘルガーの手から奪い取ること。

それを頼んでくれたのは、私がここに来た時に育ててくれた義理の両親――前までは本当の両親だと思っていた――だった。この夫

婦も守護者一家の家系で、今この街を取り仕切っているヘルガーに、嫌悪感を抱いている。

ヘルガーにオーブを渡しておけば、いずれは悪用し始める。だから、それより前に取り返すんだ。とずっと教えられて今に至るわけだ。

でも、私にはオーブを持っているポケモンが怖く映って仕方が無かった。

オーブを持っているポケモンは、オーブごとに決められた力を解放することが出来ると義理の両親から教えられていたからだ。

今思えば、何故これを私に教えたのだろうか。私の勇気を試そうとでも思っていたのだろうか。

でも、義理の両親が期待するような勇気は持ってなく、ずっと恐怖心に支配され、私はただただ命令を忠実に聞くだけのポケモンとしてしか存在できなくなった。

怖くて怖くてしょうがないのだ。オーブの力があればいつでもお前達を殺せる。というずっと昔のヘルガーの言葉が耳から離れない。それほど私は恐怖心に包まれて日々を過ごしてきた。

反旗を翻し、死ぬ覚悟で一つ抵抗を試みるのもいいかもしれない。と思っていた矢先、先程の夢を見たのだ。これのせいで真実を知るまでは死にたくなくなった。

死にたくないから命令を聞く。だから、今の私はコリンクを探している。シャラのお願いで探しているポケモンだ。

スパークシティから脱出する影は無かったとの報告がある。でも、あの爆風を耐えきるなんて到底思えないし、絶対にどこかから脱出したはずなんだ。監視していたポケモンの目を欺く形で。

この、逃げているという環境。十五年前の私の境遇に似ているかもしれない。その頃の私は、ただ生きる事に懸命だった。

なら、そのコリンクも生きる事に懸命なのでは？　そう思い、スパークシティ周辺の森を探す。

スカイツリーに続く森、海へ出るときに通る森、始まりの森が近くにある。

近くとはいっても、始まりの森は少し遠い。となると実質は残る二択だろう。もし海側なら、この島の外に出られたらまずい。私一匹の力では、まず探しにはいけないだろう。

今は早朝。私のいる組織の本部からなら、大体三日で着くはず。

簡単な見積もりを終えると、少し多めに食糧を持ち出す。私は、その森へと罪悪感と共に足を進めるのだった。

リクＳｉｄｅ４　笑顔との出逢い

日が傾いてきた。そろそろ休む場所を探さないといけないな。

僕達が始まりの森を目指して一週間。とても色々な事に直面した。食糧の事が一番大きいけれど、電気が自由に使えない生活というのはやっぱり不便だ。

電気タイプの僕達が言うのも変なのかもしれない。でも、発光しかできない電気はとても不便だ。料理にも使えないから、全部生で食べるしかなかった。

世の中にはもっと色々な種類のポケモンがいるらしい。そのポケモン達の中には、電気を使わずに生活しているポケモンもいるそうだ。

どちらも経験した僕から言わせてもらえば、それはとてもすごいことだと思う。

「ねぇリク。始まりの森ってまだ遠いの？」

僕達はまだ、流れ着いた森から脱出できないでいた。僕もメグも、外の地形なんて教えてもらってない。だから、ここがどこなのかも分からないでいた。

そんな僕だけど、スパークシティからなら始まりの森に行ける。何度も行ったことがあるから、きっと行ける。

「うん、取りあえずスパークシティに戻らないと何とも言えないん

だ」

自分の感情に嘘はつきたくない。だから、今は一生懸命に生きる道を探している。その道が、他のポケモンの道を奪うことになっても、僕は歩みを止めないだろう。

歩みを止めたら、僕は自分の感情に嘘をつくことになる。そんなのは絶対に嫌だ。

この道は僕にだけ託された道で、僕が信じ続ければ消えない道なんだ。でも、一度でも自分の感情に嘘をついたら消えてしまうような、そんな脆い道。

「ねぇリク。あれって……」

メグが、何か恐ろしいものを見つけたかのような表情で話しかけてくる。

きっと何か生物の死骸だろうと思ってそれを見てみると、確かに恐ろしいものが倒れていた。

「え、何これ」

そこに倒れている物は、僕達と同じくらいの大きさで体は青と黒。四足歩行ではない、二足歩行のポケモンだ。種族は……分からない。

とにかく、倒れているポケモンを放っておくわけにはいかない。僕は近づいて詳しい様子を確かめる。

前足を、そのポケモンの左手の脈に当てる。良かった。血は流れ

ているようだ。

次に怪我した個所が無いかを調べてみる。軽く見た限りでは、特に目立った外傷はない。

なら、何か強い刺激を受けて気絶しているか、今は寝ているかの二択かな。

「ねぇ、君。起きてよ」

前足でそのポケモンの体を摩る。結構乱暴にやっても起きる気配はない。

数分摩り続けていたが、これでも起きないならしょうがない。今日はここで野宿をしよう。地面が平らで、寝るには申し分ない地形だ。

「メグ、今日はここで、……あれ？」

先程までメグがいた場所を向いたはず。念の為、左右を見渡してみるが、その視界にもメグの影が映ることはなかった。

しょうがない、探しに行こうと思い立った瞬間、誰かのお腹が鳴る音がする。結構大きい、もちろん僕じゃない。

誰かと思ったら、後ろにいたそのポケモンからだった。もしかして空腹で倒れてたの？

「う～ん、お腹空いたなぁ」

のんきな声を発しながら、そのポケモンはピョンと起き上がり、体に異常が無いことを確認する。その次に辺りを見渡して、僕の存在に気付いたようだ。

普通なら警戒するだろうが、このポケモンは違った。最初から笑顔で話しかけてきたのだ。さすがにこれには戸惑う。

「キミは誰？　ごめんね、ボクって頭悪いから、全然種族とかも分からないんだ」

僕的にはいなくなってしまったメグを探しに先程の道を戻りたいのだが、このポケモンを放置するわけにもいかない。

「僕はコリンクのリクだよ。それより、君は？」

僕が答えた事により、彼はより一層笑顔になる。その笑顔は、一度絶望を味わった僕には明るすぎるものだった。

「ボクはカノンって言うんだ。種族はリオル。これからよろしくね！」

声は僕と同じくらいだ。つまり、年齢も同じか、それより下だろう。リオルという種族を知らないから、体格で判断することはできない。

そう、リオルは初めて聞く種族だ。多分、僕の街と関わりの少ないポケモンなんだろう。

「う、うん。よろしくね」

カノンが差し伸べた手を前足で受け取り、握手をする。コミュニケーションが取れた事が嬉しいのか、カノンの笑顔は収まるどころか、どんどん明るく、強くなっていく。

この短時間で分かったけど、カノンの笑顔はとても清々しくて、とても残酷なほどに明るい。その笑顔を見るたびに僕の決意が、少しずつ揺らいでいく。

僕だって、あんな風に笑える未来があったはずなんだ。それを奪われた今、僕には復讐しか生きる道が無いと思ってた。

でも、カノンと出会ってこの短時間。たったこれだけの時間で自分が固めた決意はすぐに流されてしまう。そんなに、僕の決意は甘かったんだ。

「ねぇリク。誰か、他のポケモンを探してるんでしょ？　手伝おっか？」

何で知っているんだろう。そんなに顔に出てたのか。

「ありがとう。でも、会ったばっかりなのに悪いね。いきなりこっちの迷惑事に巻き込んじゃって」

「いいのいいの！　困ってるポケモンは助ける決まりなんだから！」

カノンの笑顔がまぶしい。けれど、それでも見てしまうのは僕の嫉妬のせいなのだろうか。

メグを探しに今来た道を戻ろうとしたけど、その必要はなかった。丁度僕から見て死角の位置にメグがいたからだ。

木の後ろに隠れていて全然気付かなかった。僕は、カノンと話している間はこんなにも注意散漫になっていたんだ。

今は街の外、何が起こってもおかしくない。辺りを注意するくらいはしておいた方が賢明かもしれないな。

「メグ、さっきのポケモン……カノンが倒れてた場所で今日は休むから、早くこっちに来てよ」

僕はメグに近づいて、軽く前足で触れる。いわゆる伏せの体形になっていたメグは、その前足が触れた刺激からか、電撃的な早さで飛び起きる。

「え、そ、そうなの？　分かったわ。い、今すぐ行く」

そうか、メグは極度の対ポケ恐怖症なんだ。自然と見知らぬポケモンが嫌いなのが、彼女の持つ弱点だった事を忘れてた。

そう言えば、自然が嫌いなメグがここまで自然に対しての恐怖感を感じなくなったのは、自然は怖くないということが分かったからだろう。

でも、そのちょこっとの成長の為に払った代償が大きすぎて、喜ばしいことではない。

まだかなり固まってるけど、メグもカノンの前まで来ることが出来た。ものすごく緊張しているメグに対し、カノンは僕と接した時のように笑顔で振舞っていた。

「ボクはカノン！　種族はリオルだよ、よろしくね！」

「わ、私はメリープのメグ、よ！　こちらこそよろ、しく……」

メグは視線をそらしている為気付かないが、カノンはさっきよりも笑顔だ。まるで、僕達の心の底を見通してて、不安を取り除くためにやってるんじゃないかと思うほどに。

「えっと、自己紹介も終わったし、取りあえずご飯にしようか」

カノンのお腹が空いている事を思い出し、とっさに思いついた話だ。食糧を確保するために動かなくちゃいけないから、僕も一旦席を外すことが出来る。

「あ！　それじゃあ私がとって来るね！」

メグに先を越されてしまった。そして、カノンも席を立つ。

「え？　カノンはどこに行くの？」

「ボク？　ボクは『木』を拾いに行くんだよ」

木？　落ちている枯れ枝みたいな木？　それを集めて、一体どうするんだろう。

木なんて食べれるはずもない。あ、でも種族が違うのなら食べることもあるかもしれない。

枝はすぐに集まったようで、カノンはすぐ戻ってきた。持っている小枝の量も少なめだ。

「じゃあリク。火起こしをしておこう？」

火？　火って何？　電気で発生する熱で料理するんじゃないの？

カノンは板に近い形の木を下に敷き、その上で普通の小枝を手でくるくると回している。

僕はおもむろに近づき、カノンが何をするのかを見守る。

だがその光景は、僕にとっては信じがたいことだった。今まで電気でしか起こせないと思っていた熱が、その木の周辺に集まっている。どんな方法で電気を発生させているのだろうか。

僕はこういう分野は得意な方だった。でも、目の前で起こっている事が理解できない。

種族間の違い、それは見た目や能力だけではない。きっと、生活の仕方も全く違う。

僕は、目の前の光景を理解できない。でも、カノンもそれは同じ。僕達が過ごしていた生活を話しても、カノンには到底信じてもらえないだろう。

リクSide5　不幸と幸福

カノンは、僕の目の前で赤いゆらゆらと揺れる物を作り出していた。それは僕達が電気を使うくらい自然で、まるで不思議なことじゃないといわんばかりな感じだ。

少し近づいてみる。熱を発しているようでとても暖かい。でも、近づきすぎると少し熱い。ちょっと触れてしまった時は鋭い痛みが走る。

「リク、大丈夫？　火に触れちゃったみたいだけど」

「ちょっと痛いけど、これくらい平気」

この物質は火と言うらしい。赤くゆらゆらと揺れる、自分からしてみれば不思議なものだ。燃えるという現象は聞いたこともある。だって、それが街を滅ぼした原因だもん。

でも、火という物は聞いたことが無い。燃えることは燃焼というし、それは空気中の酸素と物質の炭素が結び付いて起こる現象だ。つまり、これは……燃焼？

僕の中で何かが結び付く。火というのは、燃焼の俗説的な言い方なのかもしれない。

最初は火という単語に驚いた、その次にその発生方法に驚いた。でも、原理を考えてみれば難しくなかった。

この世界もそのような感じで出来ているのかもしれない。訳が分

からないことがばかりだけど、考えてみればすぐに分かるようなことばかり。

そのうち、自分の街を壊した犯人も分かるだろう。そして、それを追いかける僕だけの復讐劇が始まる。

メグは森において行くつもりだ。足手まといということじゃないけど、周りにポケモンがいるだけで自分の意思は簡単に変えられてしまう。

メグで思い出したけど、メグはさっきからずっと火を怖がって近づいてこない。カノンには見知らぬポケモンと一緒にいるのが苦手って説明したから大丈夫だけど、そろそろ慣れてくれないと困る。

「火、安定したね。それじゃあ木の実を焼こうか」

また知らない言葉が出てきた。焼くとはどういうことだろうか。

考えをはり巡らせているうちにも、カノンはメグの近くに置いてあった木の実から、クラボの実とナナシの実を持ち出す。その最中もメグはずっと震え続けていた。

そして、その木の実を火の中に放り投げる。あれでは燃焼してしまうと思う。どうするのだろうか。

火は、食べ物ではない物を燃焼させることを指し、焼くとは調理するものを燃焼させることだとするなら納得がいく。熱すると木の実の中に成分が凝縮されて美味しくなるからね。

「リク。さっきから何を考えてるの？　難しい言葉がたまに聞こえ

るけど……」

「火と焼く事についてかな。僕の住んでいた所では火なんて無かったんだ」

カノンがとても驚いて、少し後ろに飛び跳ねる。その勢いで少し火に手が付いてしまった。大丈夫かな？

「カノン！　大丈夫？」

カノンは平気そうな素振りでこちらに手を振る。でも、その振っている手がとても赤くなっていて、大丈夫と呼べる状態ではなかった。

僕がしつこく手当てしようといっても、カノンは大丈夫と答えるだけだったので、手当てしようと声をかけるのをやめて、さっきの話の続きをすることにした。

「それでね、僕の住んでいた所では、電気という物を使って何でもしていたんだ」

とても興味津々そうな目でこちらを見つめてくるカノン。電気という物自体触れたことが無かったんだろうね。

「物に熱を加えたり、光を灯したりしてた。でも、今はもうできない生活だけどね」

カノンの表情が最後の一文で険しいものに変わる。そこまで感情を出したつもりはないけど、勝手に出てたのかもしれない。

「悲しんじゃダメだよ！　確かに辛いかもしれないけど、立ち直れるように頑張ろう？　この世界にいる全員が悲しんじゃいけないって、そういう決まりなんだよ？」

最初は険しい表情だったけれど、それはだんだんと僕に協調していく表情になって、最終的には笑顔になる。

でも、その意見に何か違和感を感じる。きっと最後の決まりという部分だろう。

最初に出会った時もそうだけど、カノンは決まりという言葉をよく使いたがる。何でかは分からないけど、きっとこの言葉に何か意味があるのだと思う。

だから、僕は笑顔を作る。心の中では笑っていなくても、カノンの言葉に従って笑顔だけを作る。

「心が笑わなきゃ、意味が無いんだよ。リク」

そんな僕に、突き放すように叩きつけられた一言。あんな経験をして、心から笑えと言う方が酷いと思う。

「じゃあ！　前の街を忘れさせて！　あのことを覚えたままで笑うなんて、そんなのって……」

感情というのは一気に流れ出すもの。一度溢れてしまえば、理性が止めようとしても止められなくなる。

きっと、僕が止められなかった言葉の中に、カノンを傷つけてしまった言葉もあるかもしれない。でも、カノンも僕の心を傷つけた。

それなら……。

「ねぇリク。ボクも悪かった。けど、過去のことを見つめてもなにも変わらない、それだけはボクから言わせて」

うん、過去のことを見つめてもなにも変わらない。でも、その変わらなさが欲しいポケモンだって、いるんだよ？　約束された出来事だからこそ、安心して見つめることが出来る。未来を見るなんてこと、今の僕にはきっと出来やしない。

それに、カノンの主張だって、出来ないことばかりじゃないか。

「それじゃあ、僕からも一つだけいい？　この世界のポケモン全てが笑顔になることはきっとできない。一匹のポケモンを笑顔にするには、たくさんのポケモンの犠牲が必要なんだ。僕はそれを身にしみて理解しているから、これだけはきっと間違いない」

「間違ってるよそんなの」

カノンの、強い拒絶の意思。どれほど強い意志を持っていたらこんなにも早く即答出来るのだろうか。

「確かに、キミはスパークシティの惨劇でとても不幸になった。笑えなくなったかもしれない。でも、ボクは一匹のポケモンが頑張ってくれたおかげで、たくさんのポケモンが笑顔になったことも知ってる」

それじゃあ反証になってない。その一匹のポケモンは不幸になったってことじゃないか。

でも、反論するのはやめた。僕もこれ以上心を傷つけたくない。焼けた木の実が出来るまで、ちょっと横になることにする。

カノンもこの話をするのは疲れたようで、火をじっと見つめていた。

僕もカノンも知らなかった。この話を陰で聞いていたポケモンがいたことに。そして、そのポケモンはとても頭が良い。僕よりも、何倍も、ね。

彼女の考えはどちらに傾いたのだろうか？

リクＳｉｄｅ５　過去に埋もれた真実

今日は星空が見えない。雲か何かで覆われているのだろう。その漆黒の黒は、今の僕の心情を表すのにはとても適切な色かもしれない。

火を焚いていて、僕達の周辺は見渡すことが出来る。近くには川があり、火の粉が飛び散る音と、水の流れる音しか聞こえない、とても静かな夜だ。

カノンと険悪なムードになってしまったその日から、僕はとても口数が減った。必要最低限のことしか話さなくなり、周りの自然に対する感嘆の言葉すら出なくなってしまった。

カノンもまた、口数が減った。いや、カノンの場合は僕と話す機会が減った。カノンはあのメグと話す機会が日を増すごとに増えていったのだ。

それに対してはどうとも思わない。でも、カノンは自分の故郷、何故あそこで倒れていたかなども話すことが無い。正直言って、とても怪しいと僕は思う。

でも、目的地がたまたま始まりの森で一致した為、一緒についてきている。いや、僕達が一緒について行っている。どんなに危ないポケモンでも、今は信じて一緒に進むしかないというのはとても不愉快なことだ。

互いのことをよく知らない僕とカノン。それでも今夜を一緒に過ごしている。それはメグが二人の仲介をこなしていたから出来たこ

とだろう。それが無ければすぐにでもカノンと別れていた。

「ねぇカノン、リク。ちょっと昔話でもしない？　それについての本を持ってるんだけど」

突然メグが話しかけてくる。つい最近の行動とはかけ離れた行動だ。

「ボクはいいよ。それは何の本？」

一応僕もメグの方へ駆け寄ったが、カノンとは対角線上に位置するようにした。あまり関わりたくない。

「これ？　これは大昔に私達ポケモンが生まれた時、一緒に生まれたオーブについてのお話よ。今から読むわね」

メグが本に視線を落とし、前足で器用に本を捲っていく。僕には古文で書かれていて意味が分からない文を、メグは読めて当然のように読み上げていく。

――昔、この世界はニンゲンとポケモンが共存していた世界だった。互いに助け合い、互いに足りない力を補いつつ暮らしていた。

ただ、この頃の事は私にもよくは分からない。ちなみに、上のお話は私の祖父から聞いたものだ。しかし、それだけが私の心の在りどころになるときもあったのだ。

私がまだ幼い頃の話だ。ニンゲンとポケモンは、互いに足りない

力を自分達で補えるようになった。ニンゲンはポケモンに頼っていた力を。ポケモンはニンゲンに頼っていた技術を。それぞれが扱えるようになった。

きっと、それがこの世界の終わりを告げたのだろう。互いが邪魔な存在に変わってしまったのだ。自分達の繁栄を邪魔する存在に。

当時は平和的な解決など望めない状況だったのだ。何をしたかは言わなくても分かるだろう。そう、戦争だ。自分達の利益と繁栄の為、必要無くなった昔のパートナーを切り捨てる。私達はそういう選択に出たのだ。

長きにわたる壮絶な戦いの結果、私達ポケモンは勝利した。平和な世界を手に入れることが出来たのだ。

しかし、それを喜ぶということは昔のパートナーの死を喜ぶ事に変わりない。そんな状況だったにもかかわらず、私達は歓喜し、自分達の勝利に酔い続けた。

何故同等の力を持った私達が決着をつけられたかというと、それはオーブの力があったからに他ならない。

オーブの力により、私達は力を何倍にも増幅させることが出来た。作る事の出来た数は十六。それだけで、ニンゲンを滅ぼすことが出来るほどに強力な兵器だったのだ。

私達の戦力が急激に減り、もはやこれまでかと思った頃に私の友人のライチュウがオーブを完成させたのだ。

最初に造られたオーブはプラズマオーブ。電気の力を増幅し、強

力な電撃を流すことが出来るものだ。また、これを使えば電気を自由自在に操ることができ、敵を電気の膜で閉じ込めるといったこともできる。

能力を見ればわかるように、このオーブは足止めが主な目的だ。実際、私の友人もそれを意識して造り上げたらしい。

そして、足止めをしている間に次々と新しいオーブが開発されたのだ。

その中でとても特殊だったのがソウルオーブと呼ばれるもので、これは自分の体に取りこんで使うもの。今までは何かに入れたり、直接持って使っていた中ではとても異色であった。

このオーブを造り上げたのはルカリオというポケモンだ。彼は自分自身にソウルオーブを取りこんだ。そして、全てを見通す目と恐ろしいまでの戦闘力を手に入れた。

このルカリオのオーブが決め手となり、戦争は終戦を迎えたのだ。

なお、このオーブは子が生まれれば子に継承されていくらしい。私はそれを知ることはできなさそうだが、とても興味深い話だ。

すまない、話題が逸れてしまった。私も研究者のはしくれで、オーブにはとても興味があるのだ。

さて、この本を読んでいるポケモン達諸君。君達はオーブを護るべくして生まれてきたはずだ。君たちの親を辿れば、全てはオーブを持っていた者たちに繋がるのだからな。

絶対にこの歴史を部外者に教えてはいけない。教えればオーブの力を悪用しようと思うポケモンが出てくるはずだ。

また、そのオーブは破壊することはできない。何故ならそれが宿命だからだ。

だから、このオーブとこの書物に書かれている秘密。それらを部外者には絶対に漏らさないように。漏らした時には、この醜い戦争が今一度現れ、全てのポケモンを不幸にすることだろう。

「これで終わりよ。私が気になった点は二つ。何故この書物が私の家にあったのかということと、この書物に書かれているソウルオーブの今の持ち主。この際前者はどうでもいいわ」

今まで理解できなかったメグの行動が、この情報だけで全て理解できるようになる。それはまるで解き方を知っている問題を解くときの感覚と似ている。

メグがカノンの方に詰め寄り、睨みつける。僕も今まで見たことがないほどの表情だ。その表情は睨みつけた者の瞬きすらも封じてしまうほどに鋭く、何もかもを見通すかのように透明だった。

「カノン君。今日まで私は君と仲良くしてきたわ。そして、確証を得た。君は私達が話していない情報も知っている」

カノンは黙ったままメグの目を見つめている。違う。多分、答えることも、目を逸らすこともできないのだ。

カノンが動かない事を確認して、メグはさらに続ける。

「最初の時よ。私達は一言もスパークシティ出身とは言ってないのに、君は私達がスパークシティ出身のポケモンだという前提のもと話していたわよね。でも、それだけじゃまだ証拠としては弱かった」

メグの表情がどんどん歪み、怒りに満ちていくのが分かる。

「だから三日間、とても仲良くお話をした。そうしてやっと掴んだわ。君がソウルオーブを持っていると言い切れる証拠をね」

カノンは相変わらず何もできない状態だ。だから、メグに言われるままにしている。

でも、その瞳の色には何かを決意したような色が宿っていた。そう、それはあの日のサンが宿していたものと同じもの――。

「私が道端に生えていたキーの実を、分からないような感じで君に訊ねたわよね。これは何？って。そしたら……」

「ボクが、メグは国語とかでは頭が良いのに、理科とかはボクの方がよく知ってるねって。そう答えたよ」

メグが言い切るよりもはやく、カノンが口を挟む。メグも訂正しない所を見ると、カノンの言っている事が正しいのだろう容易に推測できた。

一瞬出来た静寂を突き破るかのように突然カノンが笑いだす。それも大声で、この夜更けの中夜空に向かって笑いだす。

でも、次第にその声は小さくなっていき、代わりに聞こえてきたのは嗚咽だった。つまり、カノンは、泣いている。

僕もメグもかける言葉が見当たらない。いや、探そうとしてないのだ。隠していた事は事実で、それを暴かれたから泣いているだけ。そう僕は解釈した。

確かに、しきたりで話してはいけないという決まりはあったみたいだ。でも、その能力を使って僕達と会話していたことに、僕は怒りを感じてる。

次第に嗚咽も聞こえなくなり、また火の粉の飛び散る音と、水の流れる静かな空間に包まれる。

「そう。ボクはソウルオーブを継承している立派な守護者さ。サンに頼まれてキミ達と合流したんだ」

前触れも何も無く、カノンは突然語りだす。しかも、重要なワードを含んだ内容を。

「キミ達が精神的に参っているのは知っていた。だから、倒れているフリをしてキミ達の中に溶け込んだんだ。でも誤算があった。キミ達の心の傷が予想以上に大きかった事。サンからは、キミ達の心の傷を直して、安全な始まりの森へ連れて行ってほしいって言われてたから」

僕は、カノンはとても感情的に動いていたと思っていた。でも、ふたを開けてみれば僕達よりも打算的に効率よく動いていたんだ。

でも、そんなことはもうどうでもいい。サンが生きているという確証が得られたんだ。この心躍るような気持ちが誰に理解できようか。ううん、理解できるポケモンなんて絶対にいない。この喜びは僕とメグにしか分からないんだ。

「でもね、ボクも分からないんだ。何でメグがその本を持っているの？　始まりの森の地下貯蔵庫に永久的に保存されているはずなんだけど」

「それは私も不思議に思っていたわ。どうしてか分からない。でも、お母さんからこの本を譲り受けたのよ。読めるようになったら必ず読みなさいって」

僕が一匹でサンの事を考えている間に、メグとカノンはその本が何故ここにあるかという話をしていた。でも、正直言って僕は興味が無いので、カノンにサンの事を訊ねる。

「ねぇカノン。サンがどこにいるかは分かる？」

カノンの表情が自然に和らいでいくのが僕から見ても分かる。多分、今の僕は心から笑っているんだろう。

「サンは龍の渓谷を目指してるよ。昔から仲の良い守護者はそこにいるんだって」

僕の心の闇に一つ、小さな明かりが浮かんだ。今までは暗闇で見えなかった心が少しずつ見え始める。でも、サンを追うことはできない。サンはきっと考えがあってそこを目指しているんだ。僕が付いて行ったらきっと迷惑になる。

「ねぇちょっと待って。カノン君、サンって守護者なの？」

――そうか！　カノンや龍の渓谷にいる守護者と顔見知り以上関係なんだ。サンが守護者じゃないわけが無い。

「そうだよ、サンはプラズマオーブの守護者だよ」

サンを心配する気持ちしかなかった心の中に、サンを頼れるかもしれないと思える自信が湧いてきた。

きっと、サンならすべてを終わらして会いに来てくれる。そう思って、今は始まりの森を目指そう。ここにいる三人で――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0948v/

小さな世界の復讐者

2011年12月11日22時53分発行